咆哮するデヴァイセス - One's Explosive Emotion -

あお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
咆哮するデヴァイセス　－　Ｏｎｅ's　Ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　Ｅｍｏｔｉｏｎ　－

【Ｎコード】
Ｎ９６４８Ｘ

【作者名】
あお

【あらすじ】
生きたいと思う欲求があれば死にたいと思う欲求もある、立ち向かいたい欲求があれば逃げたい欲求もある。あらゆる人間の精神活動には対になるものが存在し、それぞれ独立した精神が好き勝手なことを、そう、叫んでるような状態なのよ。

第一章

柿本聖は校門の傍らに寄りかかって、ぼんやりと生徒玄関のほうを向いていた。

長い黒髪が風になびいて扇を描く。映える赤いリボン、グレー地にチェックのスカート。肩にかけているのは学校指定の鞄で、赤と込んで学校のイニシャルとラインが描かれていた。

その制服は、夏も終わりに差し掛かった九月下旬では少し肌寒そうに見える。本州地方ではこんなことはないだろうが、ここはN国における最北のエリアである。

季節が巡り雪が積もり始める季節まで、あと二ヶ月となないだろう。聖はその季節が一番好きだった。雪が降り始める、あの乾いた空気に移り行く時間が好きだった。

彼女は今、人を待っている。同学年の男子生徒で、今まで一度も喋ったこともなく、顔も合わせたこともない。どんな顔の造詣をしているのかさえ、遠目から見た曖昧なディティールしか記憶にはない。それはおそらく、相手側の男子生徒も同じだろう。それでも、彼女は彼を待っているし、反対に彼は彼女に会いにくる、という確信がある。それは天気予報に表示される降水確率や、星占いに一喜一憂する女子中学生のように曖昧なものではなく、もっと確固とした、上書きされたコンクリートがきれいだと感じられる人間の心情のような、あるいは鏡に映る自分の目の動向をじっと見たときの安らぎのように、確固としたものである。彼女はそれを実感していた。

最北の地とはいえ、県庁所在地ともなればそれなりに建物は多い。ビルは空を覆うように立ち並び、ここからでもその姿がよく見える。そのさまは人間の往来を妨げる壁のようにも見える。そのビルとビルとの隙間から、真っ赤に濡れた夕焼けが顔を覗かせている。影は長く伸び、校門の影が、程なくして彼女の影と溶け合いそうだった。彼女はその様子を一瞬だけ見て、また生徒玄関へと視線を移す。

今日は土曜日で、授業は午前中で終わっている。部活動をしている生徒が発する声が遠くのほうから聞こえてくるだけで、校門の周辺は静かなものだった。時折通過する車の駆動音が、無音の空間に彩りを与えていると言えるかもしれない。

そんな場所で、彼女は待った。

胸の内にあるのは、確信だけ。その他のビジョンは何一つ持ち合わせていない。

ただ、そうあるべきという予定調和の確信だけが、彼女をそこに留まらせていた。

そして、予定通り彼は現れる。

生徒玄関から出てきた彼は、真っ先に彼女にピントを合わせた。聖もそれを見返す。二人の視線が工作し、空間でつながって一本の線を成す。

彼は幼い顔立ちだった。身長もそれほど高くはなく、肩幅も頼りない。ただ、身軽そうで軽量、シャープな印象ではある。顔つきは幼いが、味方によっては鋭利な印象を与えるかもしれない。矛盾な印象だが、それはいわゆる、ポーチに偽造された仕込みナイフや、化粧と服装で着飾った女子高校生の内心の類のようなものだ。内側に秘められた切れ味は、相当のものかもしれないという予感を抱かせる外見だった。

聖は、彼の名前を知らない。

聖は少年のほうへと歩み寄る。緩やかな足取りは気負いがない。長く腰ほどまで伸ばされた黒髪が、冷たくなり始めた風になびく。それを彼女は手で軽く押さえた。少年は彼女の前で足を止める。その一連の動作は、まったく予定通りだった。脚本に書かれた仕草のごとき不自然さで、予定通りだった。

「待ってた」聖が切り出す。

少年は薄く笑う。「知ってる」

「それは自分の中身を知っている、という理解でオーケイ？」

「自分の中身が自分ではない、という理解をしているという意味な

ら、その解釈で間違ってはいない」
「そう……なら、私の予想は七割程度的中ってところかな。ちょうど、今日の降水確率が七十パーセントだった」
「それ、当てにならないってことじゃん」少年はおかしそうに笑う。その笑みは、対象を好ましく思っているということを表してもいた。もっとも、聖は相手に与える印象などまるで気にしてはいない。いまさら気にする必要性も感じてはいない。
少年は空を見上げている。眩い夕焼けを眺めているのだろう。確かに天気予報ほど当てにならないものはない。その証明が折り畳み傘の存在であろう。人間の化学がこのまま進歩していけば、天気通達のように、確定した未来を示す名称に変化するかもしれない。その未来は、彼女が死んだ後だろうか。そんなどうでもいいことを、どうでもいいと思いながら聖は考えていた。
少しの間二人は黙った。その沈黙は空を見るための時間だったのかもしれないし、そう思わせながら互いを観察する時間だったのかもしれない。まさか今後の展開を予想するなんて無意味な時間でなかっただろうことは、確実である。
「じゃあ、ついてきて」
聖は言って踵を返す。
少年は黙ってついてくる。そこに一切の疑問はない。
二人は、まだ自己紹介すらしていない。

「長い髪」
後ろを歩く少年が唐突に呟いた。
「え？」
「いや……」
聖は振り返る。少年は決まりが悪そうに目をそらしている。
二人は学校から駅へと続く道を少しそれ、街の外側へと歩いている。外側とは行っても街の中なので、人通りはそれなりである。歩道の横では、四斜線になった車道をひっきりなしに車が行きかって

いる。完全な静寂が訪れる場所など、今となっては富士の樹林くらいしかなさそうだ。
「自己紹介ぐらいする？」聖は振り返らずに言う。優先順位から言えば、さっきの少年の呟きにすら満たない事項だ。
「別にどうでもいいけど」
「不便だよね」
「その一点には同感」
少し間をおいて、
「柿本聖」
「井上匠」
二人はほぼ同時に言って、お互いに内容を把握し、それだけで事が済んだ。僅か二秒ほどの、何の感情的なアクションも示さない、酷く冷たく固体で乾いた自己紹介が終わった。
そのまましばらく無言で歩く。正面に比較的大きな公園が見えてくる。おそらくは著名だろう人物が設計したオブジェが、公園の随所に点在していた。それに聖は目を向け、匠は目を向けなかった。
唐突にクラクションが鳴り響く。見れば、四斜線の道路を渡ろうとしていた老人に対し、社交の高いジープがブレーキを掛けて急停車していた。その様子に匠は目をむけ、聖は目を向けなかった。
「俺たち、どこに向かってるの」
どうでもよさそうに匠が聞く。実際、どうでもよいのだろう。彼には目的という目的はないし、学校に行くのも周囲の環境に流されてのことである。それ以外の動機はまったく皆無であった。事実、高校生の大半、九割九分九厘がそうであろう。匠は輪を掛けてその傾向が強く、動機が皆無という点においては、学校生活のみではなく、日常生活、ひいては自分自身の身の振り方まで、これといった動機は見当たらなかった。ただ本能的に呼吸を要求されるから呼吸をし、本人のあずかり知らぬところで身体を腐敗させないようにあらゆるセーフティが働いている。ただそれだけの話である。もっとも、最近は諸事情により、動機は皆無でも思考せざるを得ない状況

になっていたが。
「せざるを得ない状況、って動機があると思うか」
「何それ」
「いや……」
「逃避的な動機はあるんじゃない。何も動機なんて、いいことばっかりじゃないんだから」
聖の言葉はまったくの適当だったが、言葉にしてから彼女はなんとなく納得した。自分の言葉が発せられた後にその意味を考える、というのは彼女にとっては自然なプロセスだ。また、それほど異端な性質でもないだろうと彼女は勝手に考えている。
二人は公園を突っ切る。公園の様子を伺っていたのは匠だけで、聖はフリスビーを投げられた犬のごとく視線は真正面に集中していた。
二人は公園の端にある珈琲茶の前で足を止める。店舗は小さく、クリーム色の外壁に流線型の屋根が乗っている。どこにでもある普通のコーヒーショップだ。
匠は自分の胸の下辺りに触れながら、
「これに関係あるのって、カフェイン？」
「だったら？」
「コーヒーはドラッグだって確証が持てるだけ」
「残念ながらコーヒーはただの嗜好品」
聖は薄く笑って、店の扉に合鍵を差し込んで開ける。扉ではキャッチーな木目のプレートが閉店を示していたが、まったく意に介する様子はない。自分の家に帰るような気安さで足を踏み入れた聖に続き、匠もゆっくりと扉を潜る。扉の上につけられたベルが、間の抜けた澄んだ音を店内に響かせた。
「閉店中だが」店のカウンターの奥から一人の男が歩み出てくる。巨大だ。身長は優に二メートルはあるだろう。チェーン店ゆえに相応のデザインがされたエプロンをしているが、ぜんぜん似合っていない。その様子は闘牛に猫用の服を無理やり着せたような違和感が

ある。頭はスキンヘッドで、サングラスをかけたら筋物にしか見えない外見だった。
「知ってる。鍵開けたもの」
「金は払えよ」
そう言ってマスターはコーヒーの準備に入る。岩をもやすやすと砕きそうな大きな手が、小さすぎるポッドとカップを扱うさまは、どこかコケティッシュで微笑ましかった。聖は何も言わず、匠は表情を殺している。
「そのガキがそうなのか」片手間にマスターは聞く。
「ええ」
「確証は」
「中身の流れがぜんぜん違う。外界への影響は殆どないのにね。でも、マスターじゃ判別できそうにないけど。体そのものが絶縁体になってるから」
「俺、感電はするぞ」ため息混じりに匠が言う。
「馬鹿みたいな応答は品格を下げるって自覚するべきね」
「ものの例えにしたって、もっとマシなもんがあるだろ」
「文系男子にはわかんない話よ」
「それを言うならもっと高度な例えにしろよ」
二人の現役高校生は無益ないい争いをしながら、二席分離れてカウンターに腰掛けた。マスターはその様子を微妙な表情で見ている。その表情を見て、聖は何か自分が馬鹿にされているような気分になった。馬鹿にされている、というよりは、滅多にされない子ども扱いをされているだけなのだが。両親が不明の聖にとって、それ方面の免疫はあまりに貧弱である。
マスターは黙ってカップを二つ差し出す。すでに店内には芳醇な香りが満ちていた。匠はあまりコーヒーを飲むほうではなかったが、出された手前、飲まないわけにもいかなかった。別にコーヒーだけに限った話ではなく、匠は嗜好品の類は殆ど嗜まない。酒や煙草も、成人してもお世話になることはないだろうと思う。ましてや法を破

ってまでそんなことをしようとは思わない。
　聖は心底おいしそうにコーヒーを啜っている。匠もそれに習って飲むが、熱いものを飲みなれないため舌先を火傷してしまう。それでも顔はしかめず、仕草にも出さず、ゆっくりとカップをソーサーに置く。それが彼のプライドだった。しかし横目で伺った聖の表情は、かすかに口元が上がっている。
「脱げ」唐突にマスターが匠に言った。
「何で」匠もぶっきらぼうに返す。彼には年上の人に対する敬いの気持ちはない。
「お前の気になってる、鳩尾のそれを見るためだよ」
「一つ聞きたかったんだけどさ」匠は聖のほうを横目で見る。聖は目を合わせない。「何でお前たちが、……いや、俺以外の人がさ、これを知ってるんだ」
「あんたは風邪になったからって、どうして自分以外の人間が風邪を知ってるんだ、って聞く人？　物事にはそれに対してメジャーな人間層とマイナーな人間層がいるってことぐらい、情報飽和社会の現代では道理じゃない？」
「こんな馬鹿げた症状でも？」
「風邪には風邪の、怪我には怪我の、あらゆる物事には対応するスペシャリストがいるものよ」
　匠はため息をはいて学生服を脱ぐ。むき出しになった上半身は思ったよりも筋肉質で、無駄がない。少なくとも贅肉の類はなく、筋肉の輪郭が浮かび上がっている。
　そしてその大幹、肋骨と肋骨の間、鳩尾の辺りに、まるで血袋のように脈動する赤い球体が埋め込まれていた。
「こりゃ見事なもんだ」マスターは口笛でも吹きそうな勢いである。
「かなり定着しているわ。過去の事例から見ても、かなりの深度ね」
「あんたら、これが何なのか説明できるのか、論理的に」匠は外を伺いながら言う。窓はそのままで、ブラインドやカーテンの類はなかったが、なぜか外に人影は伺えない。奇妙なことだった。

「人間の精神を分割し、それを燃料として内界と外界に影響を及ぼすデバイス。私たちは簡略化してコアって呼んでるけど、それ専門の人から言わせれば語弊があるって話。まあ、私たちみたいな現場の人間にはそんなの知ったことじゃないけど」

「精神を分割」匠は復唱する。その復唱にはインコの復唱程度の意味しかない。

「人間は唯一の精神から成り立ってはいない、ってことぐらい知ってるでしょ。生きたいと思う欲求があれば死にたいと思う欲求もある、立ち向かいたい欲求があれば逃げたい欲求もある。あらゆる人間の精神活動には対になるものが存在し、それぞれ独立した精神が好き勝手なことを、そう、叫んでるような状態なのよ。その叫びが融合してごちゃごちゃになって顕現したのが、井上匠という人間であり、柿本聖という人間であり、そしてこの、あっと、マスターっていう人間になるわけよ」うっかりマスターの本名を呼びそうになって、聖の言葉は尻すぼみになった。マスターの眼光は視線だけで熊を殺しかねない威力を持っていた。

「まあ、聞いたことぐらいはある」

「そのせめぎ合う精神と精神の狭間にあるエネルギーが大きすぎて、体に影響が出てしまう個体がいる。精神エネルギーが物理的な形を持って外に出てしまう人間がいる。つまり、内界の事象が外界に出てしまうバグを抱えた人間がいるってこと。そういう人種はその精神から発生した余剰エネルギーを制御できなくて、あんたみたいに物を壊したり、酷くなると人を殺しちゃったりするわけ」説明する聖は生き生きとしていて、匠は口を挟むのをためらった。そういえば、張り出されるテストの得点上位者リストでいつも三指に入っているのが、柿本聖の名前だった気がする。こんな変人だとは知らなかったし、第一顔すら怪しかったので、特にその文字の羅列以外にパーソナリティを考えるようなことはしなかった。柿本聖のパーソナリティは、今日を持って匠の脳に刻まれた。曰く、変人。

聖が説明している間、マスターはじっと匠のコアを見つめている。

その視線は決してふざけたものではなく、むしろ真剣そのものだった。外科手術中の医者のように、コアの脈動を見守っている。
匠は自分のコアに触れる。指が少しだけ沈み、その部分に血液が巡らなくなってかすかに白くなる。
「……それで、そのバグに対応するスペシャリストってのが、あんたら二人って理解でいいんだな」
「ああ」マスターは頷く。「一応聞いとくが、人を殺したことは」
「ない」一言。
「ならいい」マスターもそれ以上問いを重ねることはなかった。
沈黙。
「とりあえず私たちの目的は」その空気を振り払うように聖が言う。
「あんたにその使い方を知ってもらうこと。ひいては、この街の守護を手伝ってもらうこと。それは結局、自分のみを守ることにだってつながるわ」
「理屈がわからない」
「出る杭は打たれる、って言葉のとおり。今のあんたは完全に周囲から浮いていて、それを良しとしない機関なんて掃いて捨てるほどあるってこと。末端の組織から大元まで、――日常に非日常を混在させないように抑止している機関がたくさんある。つまり、まとめて言うとね」聖はニヤリと笑う。端正な顔の中で、口元だけがつりあがって並びの良い歯が覗く。「殺されるわ、あんた」
匠は今日の今日まで、完全に普通の男子高校生である。学年は二。中学から高校へとシフトするときに感じるプレッシャーからようやく立ち直り、一年間だけのモラトリアムを謳歌する時期である。三年生になれば、今なお続く無意味な受験戦争に巻き込まれるのは確実だから、今のうちに未熟で若い時代を心に刻むのが上策であろう。そんな駅もない思考を這わせ、周囲の人間からは未熟者と眉をひそめられる年代である。
断じて、生きるか死ぬかの瀬戸際の話を持ちかけられるような立場にない。

それでも、匠は思ったよりも混乱せずにその話を受け入れた。
「そっか」
「驚かないの」
「馬鹿馬鹿しくはある」
匠は脱ぎ捨てられていたシャツを着て、学ランを羽織りなおす。そうすればどこからどう見ても普通の男子高校生にしか見えない。
腹部をそっと押さえる。
「先に現象がきたから。信じないわけにもいかないだろ。実際、訳のわからない力は俺の内側で燻ってる。いつ俺を食い破って出てくるかわからない。……いつからこうなったか、全然記憶がないんだ。ただ、ある一定の時期を境に、まず景色が変わった。腹が変色して、やたら強固な玉が埋まってるみたいな形状になった。ちょっと気を抜いたり、いつもどおりの力加減で扉を開けたり物を持ったりすると、あちこちから気持ち悪いくらい力が出るってことがあった。現象ありき。なら信じるしかない。どうせ、寄る辺は俺にはない」
聖は細い指を顎にそっと当てながら、
「私を見つけたのも、その、景色が変わったから？」
「あんたは濁色の青色だ。俺は嫌いじゃない」
マスターは肩をすくめる。「ナチュラルのデヴァイサーだって珍しいのに、初期能力がこれだけ高い個体なんて、皆無なんじゃねえか？　発現させるデヴァイスも凄そうだ」
「私の知る限り、殆ど最高ね。もっとも、中身の素質がどうなのかは知らないけれど」
「早熟にしたって異様だ。視認の段階はとっくに超えているらしい。……そんな奴が、盆百のレベルで落ち着くはずはない」マスターは腕を組み、表情を緩ませる。いや、獰猛に笑みを浮かべる、といったほうが正しい。腕が組まれることで、もともと丸太のような円周を持っていた二の腕は更に膨らみ、下水の工事に使われる配管のごとき太さになる。匠はその腕を見て、自分の太ももを触ってため息を吐く。多分あれより細い。体が華奢なことが、彼のひそかな悩み

だった。
「……ところで、今までの話が全部余だ話って可能性は」匠はカップを傾ける。中身はすでに空だった。それに気がつかないほど話に集中していたのだろうか。それともこの異様な状況がまともな判断を鈍らせているのか。
「匠、あんたは何をもってその事象を真実と判断するの？」
「俺が納得できるかどうかだけだろ、そんなの」
「納得した？」
「微妙」
マスターが不意に太い指を外に向ける。「相応の非日常が見たいってんなら、その辺一帯を眺めりゃ事が済む」
言われて匠は席を立ち、窓際へと歩く。よく磨かれた窓は曇り一つなく、夕焼けの残光を店内に入れている。
そして、あるべきはずの人の気配が皆無である。
見渡す限り、まったくの平地。人工物が無人の中でたたずんでいる。窓から見える歩道にも、車道にも、立ち並ぶビル郡の窓にも、一切が絶無。無機質な電灯がともり始め、無人の街を照らしていく。しかし、そこに照らされるべき生き物の姿はない。
「この店そのものを空間から剥ぎ取って隔離してある」マスターは空になったカップを下げながら言う。「幽霊の視認のエピソードみたいなもんだ。通常、人間には物質次元以上の上位構造を知覚することはできない。エレメンタルとかマナとかを知覚できないのはそのためだ。この空間は、その上位構造に作った仮想空間なんだよ」
くっく、と喉を鳴らし、「ま、意味不明だわな。だがな、お前がここにいることが、お前がここにいて何の疑問もないことが、それ以前に、お前がこの店を見て普通に入ってきたことこそが、お前の異常性を証明している。お前に疑問があったとしても、俺と聖の間に疑問はないし、今後のプランにも問題はない。でもって、お前をこのまま放り出した場合、お前が殺されるビジョンも変わらない。俺と聖の間ではとっくに共通見解だ。あとは、――お前が今まで信じ

てきた日常の世界から、こっち側へ足を持ってこれるかどうかだ。お前の体はとっくにこっちのものになってる。後は、そう、心の問題なんだよ」
「柄じゃないわ」聖はおかしそうに言う。「いつになく多弁ね」
「新人を歓迎するときは、俺だってこんな風になる。大体俺みたいな筋肉だるまが笑い上戸のウルトラ社交性だったらかなり引くだろ。俺だったら引く」その自己分析は大体正しい。
匠はそのなんでもないやり取りから、真偽の類はどうでもよくなってきていた。ただ、自分の体に何かが起こっていて、その現象を曲がりなりにも説明できるらしい人間が目の前にいる。それだけで十分ではないのか。それに、
（退屈な時間にはならなそうだ）
一人微笑し、
「じゃあ、任せる。俺の身の振り方、殺されないようにプランニングしてくれ、妄想狂のお二人」
「妄想狂とは失礼だな、俺たちは――」店内に明かりが灯る。「アーティフィシャル・デヴァイセスの市街管理部、適当にＡＤとでも呼称するべき存在だな」

＊

地面を這う。
ずるずると肉がこすれる音。コンクリートはヤスリのように体を削っていく。
否、正確には体ではない。かつて宿っていた体を再現しているに過ぎない。それでも五感は残っているから、自分の体から這い上が

るような不快感をしっかりと感じている。
――そもそも。
感じている自分とは、なんだろうか。
今の自分なる存在はオリジナルから完全に分化した存在だ。自意識がもてるはずがない。感情それ単体で、自我を持てる道理はない。なら、自分は何者なのか。
体を包む情念は、怒り。
不完全な体に対する怒りでもあるし、
自信の力のなさに対する怒りでもあり、
誰に対するでもない無常感ゆえの怒りでもある。
これから自分はどこに行くのか。
怒りのみしかない自分に、思考の余地はない。

＊

あの破天荒な出会いから三日、休日をはさんでの月曜日。高校は平常運行で、つつがなく始まり終わることに変わりはない。毎日臨時休校を望む生徒は絶えず、なら学校そのものに来なければ良いのにそれを良しとしない自分にいらだったり、そういう人たちが集まって仮のコミュニティを築いているのが、高校校舎という建物の中身である。
匠はその中に明らかに馴染まない自分を実感しながら、退屈な三時間目の古典の授業を聞いている。カツカツとペンを走らせる音が響く中、彼はぼんやりとペンを回す。そうして五十分間の無益な時間をすごす。もし自分が高校に来なければ、有益な時間をすごせたのだろうか――考えるだけ無駄である。まさしく無益な時間の正し

い使い方といえる。
　匠はあれから柿本聖という一女子生徒について認識を改めた。有象無象の同学年から、個人へとランクアップした形である。匠はB組で、聖はD組だった。
　テストのたびに張り出される上位者リストの中で、常に三指に入る強者。実際にあってみれば、その中身は変人奇人の極みである。笑い飛ばすにも度が過ぎた妄想を頭の中に詰め込んだジャンキー、と言い切れれば良いのだが、匠自身の体の変化がそれを許さない。他人から言わせれば、二人とも真性の変体である。聖は精神的な意味で、匠は肉体的な意味で。もっとも、それを指摘するような物好きはこの学年に一人もいない。二人の共通項は、周囲から第二宇宙速度レベルで浮いているという事実だけだ。
　匠は誰とも話さない。コミュニケーションをとらない。高校に通う、という最低限の流れには身を任せてはいるが、実際にコミュニケーション活動を取ることはない。空気を読まない。先生との進路相談もすべてサボり、教室清掃、委員会、学校行事、放課後活動、ボランティア、エトセトラエトセトラ……の活動にも一切参加しない。それでも学校にだけは通う。それが彼に残された最後の社交性であり、それはすでに絶望的なレベルにまで落ち込んでいる。
　聖も似たようなものだ。匠と違うのは、彼女に向けられる視線は尊敬を孕んでいるということだろう。その性格を知らない人間からすれば、才色兼備の女子高校生だ。はっきり言って絶滅危惧種の動物より珍しい。周りに合わせない挙動も、その見力を高める一要因となっているのは言うまでもない。授業を真面目に聞いている様子はないのに、いつも成績はトップクラスである。そんな人間が実在しても良いのか、という破綻っぷりである。事実、彼女の要素において破綻していない部分は殆どない。まともだと思っていた思考も、相当にキテレツだということが証明されてしまった。
　匠は授業中に寝ない。寝ても良いのだが、寝ることが彼はあまり好きではない。どうして人間は全く理屈が不明の要因で意識を失う

ことを許容できるのだろう、と彼は常々不思議だった。それは死ぬときの感覚と何が違うのか。おそらく何も違わない。別に睡眠に恐怖を感じることはないが、進んで意識を失いたくはないというのが彼の主張だ。別に誰に理解してもらおうとも思わないが。

そんな訳で、彼のペン回しの技量は全国的に見てもトップクラスだといえる。全くどうでも良い特技である。無駄を嗜好するのは人間だけだという話はどこから聞いたのだったか。一部では指先を動かすことによって脳が活性化されるというが、間違いなく真面目に勉強したほうが脳が活性化されるのは自明である。

そんな馬鹿馬鹿しいことを考えているうちにチャイムが鳴り、十分間だけの休憩時間に入る。匠はようやく昼休みかと思って立ち上がろうとするが、まだ三時間目だということに気がついてげんなりする。この心境は、休みだと思っていた土曜日に研究授業が入ったとき並みの憂鬱加減である。まさしく、今日は学校だと思ったら祝日だった、の逆を地で行っている好例といえよう。

そんなこんなで四時間目を乗り切るまで、彼は延々と無駄を志向し続けた。その途中、彼の脳の何パーセントかは、これから自分がどうなるのかという具体的な状況について、あれこれと考えていた。これは比較的無駄ではなさそうに見えるが、現実ではない未来を志向しているという点において、やはり無駄である。人間の心配は大半が杞憂というのは、こういうことが原因だ。優れた想像力は、無駄な想像をしなければ収まらない。まさに無駄を思考している状態だ。

放課後、柿本聖はいつかの再現のように、校門の壁に寄りかかって匠を待っていた。ただ前回と違うのは、今日は平日で、正しい下校時間で、つまりそれなりの人通りがあるということだ。その中にいる二学年の割合は、単純に計算すると人ごみの三分の一に当たる。そして、その三分の一の人々にとって、柿本聖はかなり個性的でエキセントリックな人格だった。そのことを彼女はそれほど自覚して

いない。
　そんな彼女に匠が近付き、合流する。合流するという表現が正しい。しかし、周囲の二人を知る人間は、二人が待ち合わせていたものだと錯覚する。……いや、確かに待ち合わせてはいたのだが、その表現は語弊があるように感じられるのは当事者だからだろうか、と匠は勝手に考える。そんなこんなで、二人がなにやら付き合っているという話は周知の事実となるが、それはもう少し後の話になる。
　二人の間に会話らしい会話は必要ない。以心伝心などというものでは間違ってもないが、二人はあまり会話を必要としていなかった。そもそも言語化するということが不自由なのだ。言葉は一音ずつしか発声できない。なのに、頭の中に展開されているデータ量はそれをはるかに上回る。とても一音ずつでは消化しきれない。言ってるそばから忘れていく。ならば最初から会話を放棄する。会話以外のコミュニケーションを模索する。……こんな小難しい理由ではないが、少なくとも彼と彼女は、会話というものにあまり意義を感じていない。会話を拒むことはないが、あまり好んで話すということでもない。これは呼吸するように会話をしている人たちには分からない感覚かもしれない。言葉を話さなくても、人は生きていけるのだ。
　二人は数十分無言で歩き、珈琲茶の扉を潜る。匠はその瞬間にかなり神経を集中させていた。三日前の説明から、何か得体の知れないものを感じられるのではないかと思ったからだ。結果は正解で、彼の研ぎ澄まされた感覚は、気圧の変化のような、気持ちの悪いヴェールを潜るような感覚を確かに捕らえた。扉を潜り振り替えると、ついさっきまであった往来は完全に見えなくなっていた。
「よう、来るころだと思ってた」マスターが奥から顔を出す。
「三日間待てってのはどういう意味だったんだ？」匠が切り出す。三日前の初対面時の会話からして、比較的性急さが要求されるように感じられたのは、彼の気のせいだったのだろうか。
「いやな、目的のためには多少リスキーな状況だったってだけだ。今日からはきりきり働いてもらうから覚悟しとけ。……非公式な労

働だがな」
「はあ……」匠は気の抜けた返事をする。「結局、俺は始末されないために何をすれば良いんだ」
「最終目的は、俺の部下になってもらうことだ。一度の管理下に入っちまえば、そこから処分されることは考えにくい。ＡＤもお前みたいな異能力者の変体どもの集まりだ。ナチュラルだからって、そこまで目立たん」マスターは言葉をいったん切って、「……だがな、お前は一応つい最近まで一般人だった。こっちの常識も概念も何も知らない。そういう奴を上は許さん。……俺個人の判断で何とかできるなら、国中のナチュラルを集めて部隊にするんだがな」少し笑って、「今そんなことしたら、俺が殺されるがな」
「一つの組織なのにそんな面倒なことがあるのかよ。俺の命かかってんだけど」
「一枚岩だった組織がいつの時代に存在した？　他人とは得体の知れないもので、気持ちが悪いもので、それらから構成される組織が全うに機能するはずがねえ。せいぜい、機能しているふりを演出する仕組みを作るのが限界だ。現場の人間が言うんだからちょっとは説得力があるだろ？」マスターはニヤリと笑う。
「いやな説得力だな」匠はため息をはきながらカウンターに腰掛ける。聖もそれに続いた。
　マスターは奥のほうからコーヒーが注がれたカップを持ってくる。そういえば自分は前回コーヒー代を払っていないことを思い出した。まさか聖が奢ってくれたのだろうか。涼しい顔をしてコーヒーを啜る聖を見る。聖はこちらを向いて、胡散臭そうに表情をしかめた。それだけで匠の中にあった僅かながらの感謝の気持ちは朝霧のごとく霧散した。
「ところでさ、あんたらって何してんの」匠はどちらかといえば猫舌の人間なので、コーヒーは冷めるまでソーサーの上である。「まさかボランティア活動なんて言わないよな。街のためにどうたらこうたらするんだろうけど」

「まさにそのボランティアよ」聖は涼しい声で答える。
「ボランティアしてれば殺されないって？　て言うかボランティアグループが俺を殺しに来るのかよ」
「ただし荒事のボランティア」聖はカチャリとカップを置く。「私やあんたにしか見えない、……そうね、この喫茶店みたいに、本来あらざるはずのものを日常に溶け込ませないように抑制するのが仕事。言ってしまえば――」聖はこれまで見た中で最高に馬鹿にした笑みを浮かべる。「ゴーストバスターね」
「馬鹿だろ」
「その馬鹿の組織で今日も世界は平和なんだぜ。もうちょっと感謝してくれても良いんじゃねえか」
「寝言は寝て言え」
「おまえ自身の体が馬鹿みたいな話じゃねえか」
それを言われると匠はぐうの音も出ない。完全に沈黙する。
「……ま、概要はそういうこった。感情の話はしたっけか？　お前や俺や聖が体内で余剰の感情エネルギーを操作し戦うのと同様、民間人から漏れ出た感情エネルギーも確かに存在している。それらはお互いに引かれ合ってより大きなエネルギーを持ち、最後には特定の人格すら再現する」
「感情が人格を持つって？」
「感情というよりは、純粋なエネルギー体だがな。人が怒ったとき、その怒りという感情はどこに消える？　悲しいことがあったとき、その悲しみという感情はどこに消える？　人間から生み出された一つ次元の上のエネルギーは、同様に一つ上の構造、第二階層にシフトする。それらは集合し、やがて第一階層に害悪をもたらす。人間が暮らす場所が第一階層で、感情が逃げる場所が第二階層って訳だ。単純だろ？　第一階層がぶっ壊れる前に、俺たちが何とかするって訳だ」
「仮にその話がすべて真実だとして、俺はどうすれば良いんだ。そんなわけの分からんことはできんぞ。訳が分からないんだから」

「全くだ」マスターは肩をすくめる。「最終目的としてはだな、……目的というか、方向性だな、とにかくそれは、俺がお前を使って街の管理を一つこなす。結果でお前の無害性と有用性を証明する。そして、俺がそいつを管理できているということを証明する。それではれてお前はＡＤの仲間入りができて、その他の組織から命を狙われる心配はなくなる。その井上匠という名前にはタグがついて、無害なナチュラルだと認識されるわけだ」

「要するに俺はパシリ的な何かか」

「善良なお手伝いだよ。俺がカツアゲしてるみてえじゃねえか」マスターは溜息をはく。「で、だ。三日間時間を置いた理由はここにある。……この街に一体、そのエネルギー体――メンタルシフトがいる。そいつを消すことが当面の目標になる」

「メンタルシフト？」

「そのエネルギー体のことを俺たちはそう呼んでる。別に呼び名が決まってるわけじゃねえが、ＡＤではその呼び方がメジャーだな」マスターは外を見ながら、「お前の眼はもう一次元上の階層を視認できるから、エンカウント自体は問題ねえ、……が、お前、まともに戦ったことなんてねえだろ」

「喧嘩なら何回か」小学生のころの話である。

「そこなんだよな……返り討ちに遭わせたとなっちゃ、微妙に後味悪いしな……」

「俺を守るって名目は即効破棄ですか」

「ま、聖も付くから簡単には死なないだろうがな」

匠は聖を見る。聖は涼しい顔をしてこちらを見ない。こんな胡散臭い話の張本人だから何か得体の知れない能力を持っていることは予想していたが、それにしても戦えるような体つきには見えない。

「かといって、黙っていたら始末されるだろう。もうそんなに余裕はないはずだ。補足はしているはずだからな。しかるべき通達が俺の下に来た時点でアウトだ？」

「通達？」

「俺は一応、この街の管理人だからな」マスターはニヤリと笑う。
「俺自身は戦いに参加するわけにはいかねえ。管理職だからって話もあるが、俺が参加するとお前の力の証明ができねえ。あくまで、俺の部下としての仕事ができるってことをアピールすることが目的だからな」
「大丈夫。多分匠は実践型だから」聖は立ち上がる。
「……根拠は？」
「見た目」
見た目なんかで自分の運命を決めてほしくはないが、話がまどろっこしくなるくらいなら実践であたって砕けたほうがまだマシだ。匠はそういう性格だった。迂遠なことは気持ちが悪い。やるならとっととしてくれ、といったタイプだ。
そもそも匠自身にはまだこの非日常的な状況が現実だという認識が薄い。それを解消するためにも、最前線に早々に行くというのは願ったりかなったりだった。これがたちの悪いカルト話であれば、とっとと足を洗って係わり合いを持たなくするだけだった。その可能性を、いまだに一割くらいは捨て切れていない。体の異常がなければ十割笑い飛ばしているような話だ。
「匠、行くよ」
「……はいはい」
匠は立ち上がり、聖の後に続いて店を出ようとする。
「匠」マスターが初めて匠の名前を呼んだ。「お前は強い。間違いない。俺や聖みたいな後天的なデヴァイサーじゃない、自然発生した純正の能力者だ。多分、その気になって熟練すれば、お前と披見する力を持つ奴なんかそうはいねえ。だから、安心して戦って、戻ってこい。忙殺させてやるよ」
最高に暑苦しい笑みを背中に受けながら、匠は気の抜けた返事をして右手を上げる。その掌はまだ傷がない、日常の色をしていた。
そして二人は夕暮れの街を歩く。聖と歩くときは夕焼けが多いな、

と匠はぼんやりと思う。横殴りに照りつける夕日を浴びた聖は――
「何？」
「……いや」
自分は何を言おうとしていたのか。振り返った聖の顔を見た瞬間その言葉は霧のように散る。顔を背けたその先にいた通行人と目が合う。なんともやり場のない気持ちになって匠は地面を蹴った。全く無意味である。
「……で、何だってこんな人ごみの中にいるんだよ、俺ら」
「メンタルシフトは人の多いところに出やすいから。自分の体を更に強くしようとしているからね」
「知性はあるのか」
「どうだろ……少なくとも見た感じなさそう。どっちかって言うと頭スカスカになった犬みたいな感じ」
「だったら無いだろ」
「でも、時々意味ありげな言葉をしゃべったり、行動に理性的な部分が若干見られたりする。そんなんだから、メンタルシフトに人格が再現されているなんて話が持ち上がるのね。あ、私その話あんまり信じてないから。信じるとやりにくいし」
「意外と現実派？　リアリスト？」
「こんな職業でもね。……あ、私って高校生だっけ」
「職業とか言ってんなよ女子高生が……」
匠は溜息をはく。道を抜け、中央街の太い通りに出る。ここが街の中で一番人通りが多い。先の話を信じるとするなら、一番出現率が高いのはここだろう。
「視覚、オンにしてる？」
「あ？」
「一階層上の次元を見えるようにしているかって聞いてるの」
「そんなん意識したことねーつの」
「……無意識的に視覚の次元を上げている……いや、そもそもその眼自体が別物になっちゃったのか……」聖は目を細めて、「なんか、

不公平」
「なんだかよく分からんけど、お前も腹にこんなの抱えたいって意味？」
「あ、それだけは勘弁」
「全く……」
聖は目を瞑り、その上に右手の人差し指と中指をそっと乗せる。まるでコンタクトレンズをはずすときのような仕草だった。
そして聖は眼を開く。ほんのりと青く染まった双眸がそこにはあった。
周囲にかすかに青い残光を残し、聖の瞳は人ごみの中を射抜いている。透き通った青色は何者をも寄せ付けない孤独を感じさせて、匠は眼をそらした。
青は孤独な色だ、となんとなく思った。
「なあ、メンタルシフトってどんな形してんの」
「見れば分かる。エネルギーが漏れ出て体の回りに漂ってるし、そんなこと考えなくてもそもそも挙動が不自然すぎるから」
「つーかさ、見つけてどうすんの」
「消滅させる」
「どうやって」
「肉弾戦」
「……マジか」匠は引きつった笑いを浮かべる。「一般人すっげえいっぱいいるけど」
「当然街中なんかじゃ戦わないわ。大体、ここから見えるのはメンタルシフトの一部でしかない。分かるのはメンタルシフトが存在している座標だけ。だから、私たちのほうから上位階層へ乗り込む。見つけ次第接近して、座標を特定。そのまま上位階層へ肉体を転送する」
「もう少し一般人に分かりやすく言ってくれない」
「見つけたら近付く。移動する。以上」
「分かりやすい説明をどうも」

匠は投げやりに言った。わけが分からない。わからないことが多すぎて、むしろ分かっている部分を探すほうが困難だ。階層の概念もいまだにピンときていないし、その分からないものに移動しろといわれても、猫にエッフェル塔の建て方を教えているようなものだ。

「大丈夫」聖は匠の内心を読んだように言う。「私が補助する。匠、あの喫茶店の扉を潜ったときの感覚、覚えてる？　あれを想起すれば良い。あの感覚が、階層を移動する感覚。もうあんたの体事態は完全に上位階層に対応しているから、後は思うだけで良い。言ってたでしょ。後は、あんたの心の問題だって」

「そんな抽象的なことを、心で念じるだけでできるって？」

「あんた、自分が歩き始めたときのことを覚えてる？　自転車にはじめて乗れたときの重心の感覚を覚えてる？　初めて水に浮かんだときの浮遊感を覚えている？　階層の移動も、そんなものよ。言葉で説明できることなんて、ほんの一握り。体を動かすことは学問じゃないんだから、習うより慣れろの側面が必ずある。私が伝えられることはすべて伝えた。後は当たって砕けるだけ」

「砕けて良いのかよ」

「良くないわ。だから私が補助するって言ってるでしょ」

聖は微かに笑った。その微かな笑みが自信を感じさせて、揺ぎ無さを感じさせて、匠はもうあれこれ言うのをやめた。なぜかその表情を見て腹が据わったのだ。

聖に習って匠は流れる人ごみを眺める。右から左へ、左から右へと人は流れ続ける。増え続けた人間は栄えすぎた。どう考えても多すぎると思う。だからといって人間すべてを殺してしまおうとかいう極論は連想できないが、人の中で息苦しさを感じる人はどこにいけば良いのだろう。空を見て、その空の青さとどうかしてしまいたいと思う人間が、生きていける場所は無いのか。閉塞的で、周囲にあるのは物理的な壁ではなく社会という人間の壁だ。孤独を望む人間は、人であることを諦めなければならないのか。

ふと、人ごみの中に違和感を感じる。

「……ん？」
奇妙にぽっかりと開いたスペース。エアポケットのような空白地点。視界の先数十メートルに、通行人が全く通らない部分がある。
その空間は、歪んでいる。
夕焼けの光を婉曲させて、地面に落ちる陰は不吉に揺らいでいる。中心は判別できない。確固とした形を持たず、ただ人型のシルエットのような形で散って集まるのを繰り返すだけだ。
「聖」
「ええ」聖は立ち上がる。「私は補助に徹する。あんたはあれに近付いて、手を伸ばして、後は望むだけ。そのエネルギーを感じ取り、自分をそこに飛ばすイメージをするだけで良い。行き先はここと限りなく近い現実だけれど、もっとシンプルで、もっと抽象的な場所」
聖の説明は要領を得なかったが、匠は立ち上がり、その空間のゆがみへと歩いていく。後はやるだけだ。言葉が追いつく場所はすでに過ぎ去っていることを感じていた。
歪みが目の前に来る。人々は振り返りもしない。匠のことも、聖のことも、そこにその空間そのものが無いかのように素通りしていく。その情景を目の前にして、匠の中にあった一割の疑いの気持ちは氷解した。
さあ、行こう。
匠は手をかざす。ぬるりという感触があったような気がするが、実際は何も無い。冷たい水に手を浸したようで、体温は変わっていない。すべてが錯覚だった。
匠は思う。
エネルギーそのものを感じ、自分の腹部にあるコアを感じる。コアは脈動し、匠の体に余剰な感情を送り込む。
諦めや、後悔や、怒りや、懺悔や、そうしたマイナスの感情が力になる。今必要なのは喜びではない。この不のエネルギーに共鳴する、同位相のエネルギー。
体は満たされた。

引かれ合う。
後は意識するまでも無く、匠の体は上の階層へとシフトし、聖の体もそれに続く。
残された空間は正常に戻り、人々はそこを普通に通行し始めた。

第二階層は空虚な世界だった。
人がいるべきところに人がいない。無人の街並みがずっと向こう側まで続いている。空っぽの車が道の端々に止まっていることが、ここがついさっきまで人々が行きかっていた場所である、ということをかろうじて認識させた。
四車線の道の中央で、匠と聖、そしてメンタルシフトは向かい合っていた。
メンタルシフトは人の形をしている。第二階層に来てそれがより分かった。廃車をぬぐうために使われるようなぼろ布を着て、頭巾のようにそれをかぶっている。表情は伺えない。ただ獣のような浅い呼吸がここまで聞こえてくる。
匠は聖のほうを横目で伺う。聖のまとう空気は変質していた。これまでのように日常に異を構えるものの空気ではない。抜き身のバタフライナイフのように研ぎ澄まされた気配だ。青いナイフを匠は連想した。
「構えて、匠」聖が呟くように言う。「あいつが目の前にいる以上、いつ襲われてもおかしくないんだから」
「そんなことといったって、格闘技の心得なんて俺には無いぞ」
「最低でも、頭は守れるようにしといて。一撃でやられたら、私もフォローの仕様が無い」
「淡々と恐ろしいこと言うな」
匠は引きつった笑みを浮かべる。その言葉が脅かしではないことは、この場にいる匠自身が良く分かっていた。確かに、あれは躊躇無く自分を殺すだろう。自分だけではない。おそらく聖も無差別に襲われるに違いない。人間であるというだけで、いや、生物である

というだけで、それを見境無く襲う狂戦士の影だ。
匠はかつて見たアクション映画の主人公を真似て、不恰好に構える。ぜんぜんさまになっていなかった。腰が軽い。見た目はそれっぽくなっているが、ぜんぜん重さが足りなかった。聖はそんな匠を横目で見て、一つ溜息をはいた。
「今のあんたは、強い」しかし聖は匠にとって予想外のことを言った。
「何を訳分からんことを」
「階層をあげたことで、今まで縛られていたあんたの力のかせは無くなった。ちょっと気を抜いただけで、今まであんたが眼にしてきた自分の超人的な力の数倍もの出力だと思う。でも、驚かないで。それが本来のあんたの力。私たちみたいに人工的にデヴァイスの力を与えられた贋作とは違う。人間がその余剰エネルギーを回収するために進化した姿。自然な姿が、あんたのそのコアなんだから。だから、自信を持ちなさい」聖は笑った。それは明らかに匠を鼓舞していた。「殺される前に、フォローするから」
目の前のメンタルシフトから圧力が高まる。仮に行く獣の筋肉のように、しなやかに全身に力がためられていくのを感じる。それを感じて、匠は腹を決めた。あれは人間の姿を模した別のものだ。自分は今、たった一人で獣を相手にしているものと思え、と自分に思い込ませる。
ただ、不思議と恐怖心は無かった。
それがどうしてなのかは自分でも分からない。
聖は一歩下がる。それに合わせて、メンタルシフトが人外の速度で迫る。
体は自然に反応した。
メンタルシフトの腕が伸びる。手の先に早い場のように鋭いつめが伸びている。まるで本物の獣だ。その鋭利な爪は、明らかに相手を殺すことを目的としたもの。これまで聞いた話から察するに、こいつは不の感情をエネルギーとしたメンタルシフトだと匠は判断す

る。
迫り来る爪は不思議とゆっくりに感じられる。一秒後の未来を幻視する。腹部でコアがドクンと脈打った。
体を僅かにそらす。耳元で風がうなる。
目の前に狂気に染まった顔。そこに握った左手を叩き込む。骨を砕く嫌な感触と共に、メンタルシフトは紙切れのようにくるくると回って吹っ飛んだ。それでも空中で体勢を立て直し、匠の方に向き直る。
スローモーションだった時間の流れが元に戻る。加速した知覚は標準の速さに戻った。
匠は浅く息を吐く。
（凄え）
体は高揚感であふれている。今の動きが自分がしたものだということがいまひとつ実感できない。それほどに、今までの自分の動きとはかけ離れていた。
世界そのものが灰色に近くされるほどに遅い。
視覚の強化。
「余剰エネルギーを使うって、こういう感覚なわけ」
匠は充実感を味わう。今ならなんでも一人でできそうな気がした。
その後ろで聖は驚愕していた。とても初めての先頭とは思えない。今の動き一つ採ってみても、聖の動きとそれほど大きくは変わらない。聖は生まれてこのかたＡＤの仕事をしてきたプロフェッショナルだが、その眼から見ても匠の初動は驚異的だった。
これがナチュラルか。正しい進化の結果か。
メンタルシフトの顔は崩れたようにぼろぼろになっていたが、まるで映像を逆再生するかのように傷が言える。メンタルシフトの中に堆積された感情の余剰エネルギーが尽きるまで、それは活動をやめない。ここで取り逃がせばまた力を蓄え、やがて第一階層に進出するだろう。その結果は眼に見えている。人々に多大な被害を与え、事態が収集したころには、被害を修復することが困難になっている。

その前に片をつける。匠は自分から打って出た。
全力で地を蹴る。その力でコンクリートが砕け、匠の体はゼロから百へと急激に加速する。平素の匠ならその加速に全く対応できなかっただろうが、今の匠の近く速度は常人をはるかに超えている。その加速度を殺さずにメンタルシフトに拳を叩き込む。
メンタルシフトは両腕でガードする。実に人間的な動きだったが、それは今のメンタルシフトが人型を模しているからに他ならない。かつての感情の持ち主の経験が、僅かに反映されているだろう。それでも大きくよろけ、ガードした腕からは鈍い砕ける音がする。
匠の体は淡く発光している。全てを焦がす赤色の余波。
その熱量を匠は直感する。
「集え――」
体から腕へ。腕から掌へ。掌から指先へ。集中、集中、集中――
概念を固体へ。漂う感情を武器へ。

あらゆる人間の精神活動には対になるものが存在し、
それぞれの精神が好き勝手なことを叫んでるような状態。
その叫びが融合してごちゃごちゃになって顕現したのが、
井上匠という人間であり、

叫べ。
自らの感情を刃へ。
抑圧された動機を表層へ。
集え。
匠は咆えた。内側からの衝動に体を任せて。かつての自分が感じていた、世界への失望を全て解き放って、抑圧されていた感情を全て押し切って。
現れたのは、一筋の血色の剣。
匠の掌に握られた半透明の赤。固形の風が踊ったように流麗に、炎が極限まで圧縮されたように強く、その刀身は空気に不純を残す

ように不規則に揺れる。
　匠はその現れたばかりの剣を、生まれてこの方ずっと一緒だった手足のように、自在に感じていた。距離の開いたメンタルシフトに、その切っ先を突きつける。
　聖は寒気を覚えていた。実戦が始めての、ついこの前まで一般人だった男が、いきなり感情エネルギーの具現化を果たしたのだから。
　デヴァイス。
　その実態はメンタルシフトの理屈とほぼ同じ。体から漏れ出た余剰エネルギーを圧縮して形を成す。メンタルシフトと違うのは、意識があるかないか。それと、その純粋さだ。
　具現化された感情エネルギーに淀みは無い。淀みがあっては作れないともいえる。様々な感情を押さえつけ、溶け合わせること。それ以前に感情の何たるかを全て理解し、解き放つこと。どちらも抽象的な概念でしか説明できず、具現化の習得は困難を極める。そもそも物理で気で無いエネルギーを理解すること事態が困難なのだ。
　間違っても、一朝一夕で身につけられる力ではなかったはず。
　匠に突きつけられた切っ先がまるで目の前にあるかのように、遠くのほうにいるメンタルシフトは動かない。理性は残っていないはずなのに、近付くことを恐れるように停止している。そもそも一種類の感情の集合体であるメンタルシフトに「恐れ」という感情は存在していないはずである。なぜなら「恐れ」のメンタルシフトは攻撃してこないからだ。あれは妬みや恨み、怒りの感情のメンタルシフトであるはずである。ならばその判断は、かつての感情の持ち主の経験がフィードバックされているのであろう。
　匠はゆっくりと歩み寄る。
　心は静かだった。この剣を持っていると心が落ち着く。余分な力は全てこの剣の中にあるからか。全てが制御できている人間は、これほどまでに静かなのか。匠の足取りは人間のそれではなく、むしろ自然の静けさを連想させた。
　メンタルシフトが向かい打つ。必要以上の力を持って、全力で、

体の中からひねり出すように、強く、強く。
それを匠は一閃した。
流れる赤い光は血潮のようで。
その向こう側で穏やかに微笑を浮かべる匠の姿は、人間を超越した何かを感じさせた。
メンタルシフトが空に還る軽やかな音を最後に、第二階層からは一切の音が消え去った。

第二章

どうでも良いことだがこの喫茶店の名前は「珈琲茶」というらしい。匠は珈琲は好きだったが基本的にはインスタントで、そもそも一人暮らしの男子高校生にそんな金銭的に余裕があるはずも無く、引き立て珈琲はむしろキャビアやフォアグラ的な位置づけである。そんなわけでバイト（仮）先が珈琲ショップだというのはなかなか新鮮で、匠は毎日おいしいコーヒーを飲んでいた。金を払えとぼやくマスターは毎回なんだかんだでおごってくれていることが判明し、実はこの筋肉だるまエプロンもそれなりに人情に暑い日とだということが分かってきた。人の好意に甘えるのは子供の専売特許だと割り切り、狂も匠はおいしく珈琲を飲んでいる。

昼過ぎの珈琲茶には匠とマスターしかいない。この店はチェーン店の癖になぜか客入りが少ない。大方マスターが妙な結界を張っているせいだとは思うのだが。匠がいないときのこの店の様子を知らないので、本当に売れていないのか、実は売れているのかの判断はいまだに不明だ。

あれから一ヶ月がたち、匠はめでたくＡＤの仲間入りを果たした。とはいっても形式的なもので、聖とマスター以外の構成員とは一度も会ったことが無い。会う理由も無いので匠は別に気にしてはいない。

匠の戦跡はそれなりで、新人としてはかなりのハイスコアである。これでもマスターは安全第一ということで聖とタッグを組ませたがり、そのせいで個人活動が全くできないという事情もある。ちなみに今日は平日で学校があるのだが、匠はサボっている。こういうときに個人活動ができれば仕事の能率は上がるのだが、マスターはそれを許してくれない。聖は以外にもまじめなので、学校をサボったりすることは無い。これも人望の違いを生んでいる要因といえる。匠はその事実を意図的に無視していた、というよりも興味が無かっ

た。
「匠ぃ、お前学生だろ。学校行けよ、学校。仕送りうけてんだろ？」
「殆ど縁のなかった親戚からのものだし、そもそも必要最低限しか送ってくれないからあんまり恩を感じれないんだよね」
「お前な、自立してないんだから偉そうに言うな」
「我侭は子供の特権ってことで見逃してよ」
　匠の両親は匠が小学生のときに他界している。匠自身はそのことをあまり悲しいと思わなかった。いや、悲しいというよりは、何かいなくなるはずのないものがいなくなってしまったという喪失感のほうが強かった。案外匠はまだ両親の死を受け入れられていないだけなのかもしれない。本人にその判断は付かない。曖昧な気持ちだから、今の生活を支えてくれている親戚とも殆ど顔を合わせないし、その必要性も感じない。もしこの仕事で自立がかなうなら、それでも良いと匠は思っていた。その考えがまさしく幼いということに匠は気が付いていない。
　匠は珈琲を啜る。豊かな香りが体を満たした。
「ところでさ、もっと大掛かりな仕事は無いわけ」
「お前、いつの間にかずいぶん勤労少年になったんだな」
「だってこっちの世界じゃ力を使うわけには行かないし、もっといろいろしてみたいんだよ、俺」
「……お前にはまだ早い」
「何で」
「良いから。とりあえずもっと平和的な仕事をしてろ。報酬は払ってるんだ、文句は無いだろ」
「そりゃ、そうだけど……」
　匠の言葉は最後のほうが形を失って、結局何を言いたかったのかが分からなくなった。多分、自分はまだいろいろできるということが分かっているのに、それができない欲求不満のようなものだろう。
「そろそろ一ヶ月だしな、ＡＤの他の構成員と会っても良いだろう」
「それ、俺にメリットあるの？」

「見聞が広まる。こっちの世界のことが実感できる。何よりお前は力はあるが常識が足りない。こっち側の常識な。得体の知れないエネルギーと戦うためには知識が必要だ。お前にはその知識が不足している」
「そんなん無くてもやれるっつの」
「最高でも人型しか消したことが無いやつが偉そうにすんな」
「……人型以外にいるのか？」匠は意外そうに言う。
「そりゃ、変幻自在だ。その感情の強さによって形状は変わる。リアリティも変わる。お前が最初に遭遇したメンタルシフトはそれなりのリアリティだったらしいから、まあまあ強い思念だったんだろう。……面白いぞ、空想好きの奴らの感情が飽和したりすると、ドラゴンとかデビルとか、そういうえげつない外見になったりするからな」
「どこのファンタジーだよ、滅茶苦茶すぎるだろ」
「そりゃ、動力源が人の感情だからな。エントロピーって知ってるか？　その概念から行けば、感情から得るエネルギーてのはまんざら悪いもんじゃねえ。ちょっと自由すぎるのが玉に瑕だが、やがて俺たちはこのエネルギーを完全に制御する方法を開発して、この世界のエネルギー事情は変わる。抑圧された感情がエネルギーになる時代が必ず来るはずだ」
「別にあんたが作るわけじゃないだろ」
「そりゃそうだが、お前もその一端だってことを言いたいんだよ、要するに」
「ふうん……」
　匠は気の無い返事を返す。そんな宇宙のエネルギー事情を引き合いに出されても実感がわかない。そんな世知辛い理由よりも、あのフラットな心境にもう一度なれるかどうかということのほうが重要だった。
　全てがあるがままで許容された心境。
　あまりに強烈で鮮明には覚えていないあの赤色。

もう一度見てみたいと思った。
「何の話だったか、そうだ、構成員な。適当にアポとって予定作るから、ちゃんと行けよ」
「学校は？」匠はニヤリと笑う。
マスターは肩をすくめただけで何も言わなかった。

その週の日曜日、匠は街中のファミリーレストランにいた。きっちり日曜日に予定を入れてくるあたり、意外とマスターの根っこの部分は教育者なのではないかと想像する。時刻は五時を少し回ったところ。場所の指定は相手側からしてきて、わざわざこっちの地域に合わせて会いに来るということらしい。ご苦労なことだ。
匠は適当にアイスコーヒーを頼んで、季節はずれだったかと少し後悔した。そもそもこの手のアイスコーヒーは氷で水増しされていて、全体の半分くらいは氷の体積だ。誰かが凍りぬきで注文したら量が倍になったという話をしていた気もする。そんなわけで、一人氷をかじりながら相手の到着を待っている匠であった。
三十分ほど経っただろうか、時間を間違えたかという謙虚な自分と、遅刻している相手に腹を据えかねている自分とが混在し始めたころ、背後から足音が聞こえる。
振り返る。そこにいたのはカジュアルな服装をした女性だった。女性は匠を見てニコリと微笑む。女性が来るとは思っていなかった匠は少々うろたえるが表情には出さないように努力する。
彼女はメガネを掛けていた。その向こうで理知的な瞳が匠を見ている。髪は肩口まで伸ばされて、明るい茶色に染められていた。裾の長いシャツにホットパンツ、薄く模様が入った黒いレギンス。身長が高く感じるのはヒールの付いた靴を履いているからだと気が付く。カツカツという軽快な音はこのためか。明らかに匠よりも年上である。二十前後といったところか。
「待った？」
「あ、っと、はい」少し迷って慣れない敬語で答える。

「秋峰蛍です。聞いているとは思いますが、ＡＤの実戦部隊の一人です」
「あ、井上匠です、ども」そんな話聞いてねえよ、と思いながら、匠は軽く会釈をする。年上の男性に対しては不遜である匠も、相手が女性となればとる対応は代わってくるらしい。「わざわざこのためだけに来たんですか？」
「いえ、そういうわけじゃないよ。別件でここの警備を増強することになって、私が選ばれた。だから、実質的な私の労力はあまり変わってない
「警備を強化？」匠は聞く。蛍は匠の正面に座った。
「なんだかこの街、ざわついてるんだよ、最近。原因は分からないけど、エネルギーが増える傾向にある、何か欲求不満なんじゃない、この街の人たち」
蛍は微笑む。そんなこと言われてもな、と匠は言葉に詰まる。
「そんなわけで、現実世界に影響が出る前に、ある程度エネルギーの回収を命令されたわけ」
「はあ……」
「結構切羽詰って得ると思うんだけどさ。ま、見てないから何とも言えないけど」
「自由にあっちと行き来できればいいんすけどね。そしたら先手を打ってどうにでもなりそうなものっすけど」
「座標が特定できないと流石に無理だね。……ＡＤの上位デヴァイサーの中には、座標を自分で作り出して移動することのできる人もいるけど」
「そんな人がいたら毎日戦えるっすね」匠は何気なく言う。
「匠君は戦いたいの？」
「そういう訳じゃないと思うんすけど、実際、自分が何をしたいのか分かってないし。多分スリルを味わいたいだけだと思う」
「そう……」蛍は何か言いたそうな表情だったが、結局何も言わなかった。

沈黙が二人の間に流れる。
何か言おうと思った矢先、不意に店内の電気が消えた。
停電かとも思ったが、それにしてはタイミングが不自然すぎる。外は晴れていて、停電の要因になるようなことが思い浮かばない。
「……早速か」
蛍は言いながら立ち上がる。その表情は鋭く、先ほどまでの温和な雰囲気は感じられない。あくまでも怜悧な戦闘者の姿がそこにあって、匠は自然と気おされて後ろに下がった。
「え、え？」
「まだ自己紹介し貸してないのにね。初の共同戦線は会って早々というわけだ」
「な、どういうこと」
「多分向こう側の移送でここが侵食されてる。第二階層から第一階層への影響が出始めてるってこと。全く、ざわついているとは思っていたけど個々まで酷いだなんて、労災手続きでもしておこうかな……」半ば本気のように蛍は言う。「というわけで、せっかくだから手伝ってくれない？　互いの親睦を深めるって意味でも、結構有意義だと思うけど」
「俺が？　いいのかよ、俺ど素人だぜ」
「あの筋肉ダルマの部下でしょ？　戦力としてカウントするには、それだけで十分だと思うけど。ほら、早く行くよ。回りの人たちも動揺してるし。事態の回収は早いほうが良いに決まってるでしょ」
せかされて匠は立ち上がる。とんだ初対面もあるものだ。確かに互いの親睦を深めるのにこれ以上のものは無いかもしれないが、それにしてもやりすぎだろと思う。
匠個人としてはそんな些細な問題よりも、純粋に再び力を行使できる機械が回ってきたことに喜んでもいたのだが。
「じゃあ、行くよ？」
「座標は？」
「補足済み。実体化はしてないみたいだけど、影響の範囲が広いか

ら細く事態は簡単簡単」
蛍は匠の手を取る。蛍の手は冷たかった。その冷たさに匠の思考も落ち着く。ＡＤに入ってからの初めての実戦だった。不測の事態でこそ気分も盛り上がるというもの。匠はこの事態を歓迎してすらいた。
さあ、戦おう。
理由なんて二の次で良いだろう。
互いに叫びあった結果が、少しでも純粋であるように振舞おう。
ついさっきまでファミリーレストランの一角に座っていた二人の姿は、瞬きをする間に最初からそこにいなかったかのように消え去った。跡に残されたのは、急な停電でざわめく店内の人々だけだ。

二人は第二階層のファミリーレストラン内に立っていた。立っている場所はついさっきまでいた第一回想のレストランと殆ど差はないが、辺りを包んでいる空気が変質している。第一階層のときよりも感情デヴァイスの気配をより濃密に感じ、匠は体に制御できる力の部分が発生したことを近くした。今すぐにでも街中に繰り出して思う存分力を使いたいところであるが、そういう状況でないことくらいは分かっていた。
蛍は真剣な表情で辺りをうかがっている。一見するとそのたたずまいに変化は見られないが、先ほどまでと体を包んでいる力の量が間がう。マスターの言葉を借りるなら、蛍も後天的に力を与えられたアーティフィシャルなのだろう。体のどこかに、匠と同様にコアがあるはずである。その代償と機能は別にして。
「匠君、何か感じる？」
「いや、俺の感じる限りでは何も。あちこちに漂う感情は感じるけど、特に際立ってやばそうなのは分からない」
「そう……しまったな、探知系の人も一緒に連れて繰ればよかった。部下にいるんだよね、一人。思いっきり無愛想なやつが。探知形のやつは暗い奴ばっか」

「冷静って言ってあげましょうよ」
「私、評価は正確な言葉ですのを心がけてるの」蛍は微笑む。「とりあえず外に出ましょう。店内に影響を及ぼせる距離だから、百メートル剣内にいるのは確実だと思う。ここから何も感じないってことは店内にいる可能性は低そうだし、目視に頼る方向で」
「原始的っすね」
「基本に忠実と言ってほしいな」
「正確な言葉？」
「もちろん」

二人は外に出た。時刻は五時を少し回ったところだったと記憶している。ビルの隙間から赤くなり始めた空がうかがえる。人の気配が全くしないことを覗けば、この世界は今まで暮らしていた日常の世界となんら代わりが無い。
辺りを包んでいる静寂は無機質で、心が落ち着く。信徒静まり返った空気に触れて心もフラットになる。これだ。この感覚を匠はつかみ、つかんだ先から光のように逃げていく。
今度はつかめるだろうか。
「探そう。何の感情が結晶しているのかは分からないけど、現実世界に簡単に影響を及ぼせるレベルのメンタルシフトだから、油断しないで」
「そんなこと言われなくても、そんな余裕ないっすよ」
「だといいんだけど」
この時点で蛍は匠の性質をなんとなく理解していた。彼の力の原動力になっているのは抑圧された自己顕示欲だ。それはプラスのエネルギーにもマイナスのエネルギーにもなりうる。非常に移ろいやすくて、当人の状況と環境に大きく影響される。下手をすれば体に多大な負荷をかけることになるだろう。消費される感情エネルギーと体との釣り合いが取れなければ、具象化したエネルギーは体を簡単に破壊する。それから身を守る方法は、努めて冷静であることだ

けだ。
　二人は並んでレストランの周辺を歩く。このあたりは太い道路に面していたが、奥に入ると一車線の道路に変わる。大きいのは国道と駐車場だけで、その周辺の道は住宅街のそれと比べてもそれほど変わらない。
　しかしそのこと事態は好都合といえる。注意を向ける範囲は少なくてすむからだ。不意打ちの危険性があがるといえばそうだが、二人の目的はあくまで状況の収集であって、そこに無傷で勝利するという条件はない。無論むざむざ傷を負うつもりはなかったが、それほど神経質になる必要はないだろう、という蛍の分析だった。ちなみに匠はそこまで考えはいたっていない。自分が怪我をすることなど想像もしていないし、自分の怪我を傍らの女性が許容していることも考えていない。
　二人は一周ぐるりと店の周りを回ったが、特におかしなところは存在しない。メンタルシフトが表れると発生する空間のゆがみも、感情エネルギーの不自然な動きも、一見すると何もないように見える。しかし現実に店内に異常は発生し、それはすなわち現実世界へのメンタルシフトからの侵食を意味する。事態は思ったよりも深刻である。
「見つからないんすけど」
「うーん……」蛍は困ったように首をかしげる。「いないわけないんだけど……そうだな、異常が起きたのは店内だよね。だったらもう一回店内をくまなく調べてみよう。ああ、もう、探知系をつれてこなかったのは本当に失敗だった。作業効率が落ちる落ちる。分業は偉大だね。私は流れ作業賛成派」
　蛍はぼやきながら自動ドアを潜る。この世界においても電力の供給はされているらしい。第一階層で消えていた店内の電気は、第二階層ではきれいに点灯していた。
　――それはおかしい。
「蛍さん、何でこっち側の電気は点いてるんですか。第一階層と第

二階層の基本構造は同じっしょ。だったらここも消えてないとおかしいんじゃ」
「……確かに、そうだね」
蛍は天井を見上げる。そこには店内を照らす蛍光灯がぶら下がっている。それ自体は別に不自然ではない。だがここでは、不自然でないことが不自然なのだ。
「電気系統への変化、か。二段階変化のメンタルシフト。気をつけてね匠。今回のは思ったよりも大物だよ」
「分かったんすか？」
蛍は頷く。「店の人には悪いけど、一本壊させてもらうよ！」
蛍は飛び上がった。通常の人間では考えられない跳躍直だった。天井すれすれまで体が持ち上がる。蛍の掌から小さな刀のようなものが出現したように見え、その直後には天井の蛍光灯が一本砕けていた。
僅かな電気が接続部分から放出される。
その放出はとまらず、電気は収束し一つの形を作り出す。
それは獣の姿だった。しなやかな筋肉と鋭い瞳を持ち、白く電気を帯びている。全長は三メートルほどだろうか。巨大なそれは、豹を模していた。
明らかに自然物ではないその姿は、どこまでも野生的だった。電気で構成されているはずの空は呼吸で小さく波打ち、研ぎ澄まされた牙が口の隅から覗いている。鋭い眼光は野生の狩人のそれで、人間のような矮小な生物など、その一睨みで殺せそうなほどだ。
匠は右手を地面に向ける。
体に感じるのは不特定多数の感情のデヴァイス。
人間を構成する不条理なパトス。
互いに反発しあい形を保たない抽象概念を、細く強く固めていく。
固めた内側からは炎のようにあらぶる叫び声が聞こえる。それすら封じ込める。
匠の右手からは前回と同じように不透明な赤色の剣が延びていた。

全長二メートルほどで、二本刀のように細いが西洋剣のように鋭角なフォルム。
（――できた）
若干不安だったが、想像していたよりもずっとスムーズにできた。むしろ体がやり方を覚えていたといったほうが正しいかもしれない。匠が志向する前に感情は集まり始め、デヴァイスは勝手に反発を始める。それを抑制する意思さえあれば、後は自然の成り行きに身を任せるだけだった。
「凄い構成速度だね。範囲は狭いにしても」
「俺、これしかできないから」
「十分だよ。……じゃ、ちょっとの間あいつを足止めしといてね。私のデヴァイスは具現させるのに時間がかかるから」
「ちょ、え？」
「頼んだよっ！」
どん、と背中を押された組は一歩前に出る。目の前にいたのは飛び掛ってきた電気豹の姿だった。
「う、お――」
反射的に右手を振るう。赤色の刀身は豹の姿を切り裂いて両断するが、すぐに結合してもとの姿に戻る。おそらくは体そのものが全て電気で攻勢されているのだろうと創造する。
匠はバックステップで距離を取り態勢を立て直す。幸いにして電気豹の注意を引くことには成功したらしく、豹はさっきに満ちた目を匠のほうに向けて動かさない。匠は眼だけを動かして蛍の姿を探すが、どうやら狭い店内の更におくに言ったらしく、ここから姿をうかがうことはできなかった。どうやら本気で自分ひとりにこの化け物の足止めをさせるつもりだと確信して、匠は引きつった笑いを浮かべた。
「実戦二回目のど素人に足止めなんかさせるか、普通」
匠は右手に左手を添えて下段に構える。重心は落とし、足の力を抜いて体を自由にする。これまでの経験を思い出す。体が自由に動

いていると感じるときは、いつだって脱力の状態によっていたときだ。体を硬くしては反応できるものにも反応できない。戦闘とは一連の動作なのだから、一度交わして終わりというわけではない。神経は集中させ相手の動作に気を配るが、それらは全てリズム、一連の動作であることを自覚しなくてはならない。

さあ、来いよ。

豹はテーブルをなぎ倒しながら直進する。それを視界の中央に捕らえる。こちらまで到達するのに必要な時間は僅か。地球が作り出したフィールドに対し、人工物の中というのは狭すぎる。

匠はけん制としてコンパクトに右手を振る。そのまま後ろに一歩下がる。件をよけてつめを立てようとした豹の体が鼻先を掠める。体から冷や汗が出るのを感じながら、今度こそ攻撃の石を載せた斬撃を放つ。それは豹の背中にクリーンヒットするが、結果はさっきと同じだった。

（何がいけない）

匠は距離を置きながら思考する。その間にも豹は市電を撒き散らしながら接近してくる。ざわりと肌をなでる冷たい気配を感じ、匠は反射的に横に飛びのく。今まで匠がいた空間を、二本の細い雷撃が通過していった。

どちらにせよ、この狭い空間ではこちらに不利だと判断する。剣を振るうにも障害物が多すぎるし、回避行動をするにも物体が多すぎる。その両方を無視している相手との戦闘において、こちらだけがハンディを追う環境で戦うなど馬鹿げている。

壁に眼は知らせる。余波で割れた窓がいくつかある。匠は走りながらそこに移動し、横目で電気豹の攻撃を確認する。それと同時、匠は転がりながら外に出た。それを追って豹も外に出てくる。二人の距離は吸うメートルほど。顔の詳細すらはっきりと近くできる距離。街の中心部、車道の真ん中で二つは相対している。

「広くなったら、こっちにだっていろいろ試したいことあるんだよ」

匠はかける。加速度を殺さぬままに車の陰に隠れる。現実とこの

世界は「人がいない」という点を除いて完全に一致している。ならばこの車の中には、いくらかのガソリンが入ったままになっているはずだった。
体そのものが電気で構成されている豹は、その体を車に突っ込ませる。匠は飛びのく。瞬間、眼がくらむような赤色の炎が噴出した。
（――どうだ？）
匠は炎と、その中にいるだろう表に眼を向ける。体そのものが物理攻撃を無効化するなら、こうした形のない攻撃なら通るかもしれない、という直感に基づいた行動だった。
炎の中から体が崩れかけた豹が体を現す。緩やかに体が再生しているが、秋からに斬撃のときよりも回復速度が遅い。
ビンゴ、と匠は口元を斜めにする。この周辺にはファミリーレストランということもあって車がたくさんある。これを利用すれば蛍の手を借りなくてもこいつを倒せるかもしれない。
視線を走らせた先にいたのは、呆然とこちらを見る蛍の姿だった。
「ちょ、っと君、何してんの」蛍は言いながら駆け寄ってくる。その手には何も持たれていない。
「何って、ほら、もうちょいっすよ」匠は得意げな表情で電気表を指差す卯。体の回復に時間を取られているのか、豹はこちらを敵意のある目でにらむだけで、具体的な行動は取れていないらしい。
「そうじゃなくて！」突然の蛍の大声に匠はびくりとする。「なんで外に出て、しかも結界も張らずに、街を巻き込んで戦ってるのかってこと！」
「……は？」
「もしかして、君……、こっちのこと、何にも分かっていないんじゃない？」
匠は答えられない。ただ蛍のほうをじっと見ているだけだ。顔にはさっきまで浮かべていた得意げな笑みの残滓が張り付いている。
「物理的に壊すだけなら向こう側には影響は出ない。けれど、デヴァイスが絡んだ攻撃は、向こう側にしっかり影響するんだよ。私た

ちが最初からデヴァイスを展開しておかないのはこのため。第一階層に不必要な影響を及ぼさないため。仮にデヴァイスを用いた攻撃をするときも、結界を張って現実世界とこちら側を完全に隔離してから行うもの。――今の話、聞いたことある？」

匠は黙って首を振る。蛍はがっくりと溜息を吐いた。コミカルな動作だがまとった空気は重く、瞳は鋭いままだった。そのことが匠に得体の知れない恐怖感を募らせる。

「……まあ、私の責任だよね」

「あの、状況がいまいち飲み込めてないんすけど」

蛍は優しく微笑んで――それは死者に対する笑みのように優しげな笑みだった――右手をそっと宙に浮かべる。その腕の先には、うなり声を上げる豹の姿があった。

「絶界からのデヴァイスのセカンドオープンを宣言する」

つむいだ言葉は誰に向けてでもというわけではなかった。ただ蛍の内側にのみ意味を成せば良い起動のパスワード。

蛍を中心として、半透明の窮状のものが拡散して、一瞬で消える。先ほどまでとは違って、何かに包まれているような静寂が新たに生まれていた。ただ静かなだけとは種類の違う、切り離された静けさだ。

その中で、蛍の伸ばされた右腕が発光する。

辺りで粒子が塵のように舞い始め、それらも共鳴したように発光する。一箇所に集まり、一つの形を作るのにかかった時間は殆どなかった。

右手にあったのは、黒い強弓。

鈍い光沢のある鋭角なフォルム。蛍の身長よりも更に大きい。斜めにされて地面に置かれていた。それらが連想させるのは、相手を噛み千切る牙の姿だった。

呆然とする匠をよそに、蛍は左腕を弓にそっと添える。その左腕も発行を始め、一瞬跡には剣のシルエットを持った何かが顕現している。それも弓と同様の黒色だった。

回復を終えた豹が飛び掛る。その速さは野生の獣のそれで、人間では逃げることも、ましてや迎え撃つこともできない。
それを正面に見据える。
引き絞る音は断頭台の刃が上がっていく音に似ている。それでいてピアノの音色のように澄み渡っている。
「発現、想剣」
呟き、放つ。
空気のひずみと共に、電気で構成されているはずの豹が吹っ飛んだ。まるで物理的攻撃のように、不自然に空中で進行方向を変えた。地面にたたきつけられる。体勢を立て直そうと眼を上げて、
その野生の瞳がそれを見て、一体何を連想しただろうか。
空一面を覆う剣の層に。
一本一本が黒く、そして淡い白色の光をまとっている。
蛍がカラン、と弓を地面に置く音と同時、剣の層は豹を貫いた。

世界が正常に戻る。体を包んでいた全納棺は消え、体に重力間が戻ってくる。世界には人のざわめきが戻り、吹き抜ける風には都会のにおいが混じる。
それと、煙の匂い。
「え……」
匠は呆然とそこを見る。道の中央、匠が誘導してメンタルシフトを激突させた車から、もうもうと黒い煙が上がっている。それだけではない。ファミリーレストランの窓ガラスは軒並み割れ、ガラスの破片が散乱している。その付近で倒れ地を流している人も大勢板。救急車の甲高いサイレンの音が木霊する。
匠は動けない。
「……これ、俺がやった……？」
「……ええ」蛍は迷いながら頷く。どうするのが一番良いのか決めかねている表情だった。
「……俺が、皆を傷つけた？　どう、して……俺、そんなつもりじ

や」
眼を背けて走り去りたい衝動に駆られる。しかし人々のうめき声がそれをさせない。眼を瞑ることさえ許さない。視界一面が破壊の後。その破壊を自分が行ったという事実が、匠の内側に針のように突き刺さる。痛みは鈍く、今すぐにでも掻き毟りたい。だというのに、体は思ったとおりに動いてくれない。
「今回のことは、私にも責任がある。説明と処分は私もかぶるから、そこまで大事にはならないと思う」
蛍は事実を述べている――いや、聞きたいのはそういうことではなかった。なら何なのか。自分では判然としない自虐的な心が内側を満たしている。
コアが熱い。
誰かに攻めてもらいたいのかもしれない。だから自分はここから動かないのかも。理性はここから逃げろ、逃げろと警鐘を鳴らしてくれているのにもかかわらず、匠の両足は根を張ったように動かなかった。
結局、蛍に付き添われてその場を後にするころには、救急車が二台とパトカーが三台きた後だった。

気が付くといすに座っていた。はっとして辺りを見ると、そこはマスターの店だった。目の前には冷め切った珈琲が置かれている。奥のほうから食器を洗う音が聞こえる。
匠は酷く散漫な動作で珈琲を飲む。冷たい苦さは体の内側にすっと入った。
「起きたか」
カウンターの向こう側からマスターが顔を出す。相変わらず筋肉ばかりの暑苦しい男だったが、その表情は割合神妙になっている。似合わないからやめるべきだと匠は思ったが言わなかった。
「……俺、寝てた？」
「さあな、眼を明けがなら寝る特技があるのなら、寝てたのかもな」

マスターは鼻を鳴らす。「珈琲、飲むか」
「いらない」
「そうか……」
マスターは落ち着きなく辺りを見渡している。きょろきょろとする動作はこの男には全くに会わない。そもそも喫茶店の店長なんて神経質な職業が合うわけがないのだ。そういう体つきをしている。無差別級の格闘技のリングに上っていくような、頑強な体つきだ。
「すまん」唐突にマスターが謝った。匠は驚いてマスターのほうを見る。「もっと真剣にお前に教えるべきだった。力につりあう知識を教えてやるべきだった。俺の落ち度だ」
「き、気持ち悪いからやめてくれよ」
「いや……今回のことは少し堪えた。俺も、お前もな。力を持つ人間は知識を持つべきだって野は、至極当たり前の道理なのにな。……それよりも、聞くべきことがある、か」
マスターは匠に向き直る。寒気がするほど真剣な表情だった。出会って一ヶ月間、これほど鋭い顔をしたマスターを見るのは初めてだ。
「これから裂きも、俺の部下でいたいか」
「……どういう意味だよ」
「そのままだ。お前はもうＡＤのリストに登録されているから、ＡＤにもそれ以外の組織にも殺される可能性はない。お前の安全を確保するって言う第一目的は達成したんだ。だから、最前線の俺の元にいる必要性はもうない。お前の力は証明されているんだから、もっと光栄の、安全なところに良くって選択肢もある。事実、光栄にはそれまで日常生活をしていたがわけありでＡＤに入ったって言う人間もいる。ここよりはずっと人間的な職場だ」マスターは言葉を切って、少し迷うように、「……お前には両親がいないだろう。きっとそこの連中は、自分の傷を知っているから他人に優しくできるはずだ。お前の力になってくれると思う。大丈夫だ、そこでは学歴なんて関係ない。高校を中退したとしても、何も気に病むことなん

てない」
「それは、あんたの希望か」
「……」
マスターは答えない。
「俺が邪魔だって言うなら、出て行っても良い。一応あんたは恩人だ――俺の人生の仲では限りなくレアな、な。そういう人に迷惑をかけるような人間にだけはなりたくない。誰かに迷惑を翔るって言うのが一番嫌だ。自分の価値さえ分からなくなってくるから。……でも、迷惑じゃないなら」
匠は顔を上げる。宣言する男の顔だ。双眸に迷いはない。他人を思わずに、自分の世界しか感じていなかった少年の姿は消えいていた。
もがくことは自由だ。誰にでもできる。ただ、もがかなければ現状に停滞するだけだということが明確なだけだ。
その選択肢は、いつだって個人の内側に握られている。
「俺に、ここでもがかせて欲しい」
匠は言って、それから照れくさそうにそっぽを向いた。心なしか頬が赤くなっている気もする。それは差し込む夕日が移ったせいだろうか。
マスターはこれまでで一番嬉しそうな笑みを浮かべて、匠の背中をドンとたたいた。あまりの力に匠は咳き込む。
「決めたぜ。お前は今日から、本当の意味で俺の部下だ。俺が、お前を生かしてやる」
その宣言は、十七年間心のそこのほうで沈殿していた燻りを、優しく溶かしたような気がして、
それを認めたくなくて、匠はただそっぽを向くしかなかった。

第三章

視界を塗りつぶすように迫る脚部を両腕でガードする。ストッキング越しの細い足は、まるで鋼鉄をクレーンで振り回したときのような重さがある。ガードした両腕はしびれ、背骨までの感覚が一瞬消失する。それから気が付くのは、今時分が地面を無様に転がっている真っ最中だということと、天井のない真っ白な空間が上にも広がっているんだな、ということだった。これは別に比ゆではなく、今井上匠と柿本聖は、真っ白な何もない空間に二人きりだった。当然、吹き飛んだのは匠で、吹き飛ばしたのは聖である。

この空間は聖が作ったもので、マスター曰く喫茶店の仕組みを応用したものだそうだ。空間そのものを圧縮し、別移送に展開する。現実世界に展開するわけじゃないから、空間的な矛盾は発生しないという。その理屈は全く分からないし、詳しい説明を聞いても分からないだろうが、とりあえず今一番大切なことは、ここには逃げ場がなく、ひたすら戦闘行為を繰り返すしかないという事実から逃れられないということだった。

同級生でしかも女子生徒と密室、甘美な響きなのはあくまで響きだからこそ出、事実にしてしまえば実態が露出する。実態というのは覆い隠すヴェールがないということで、それはすなわちよろしくないことがそのまま露出しているということだ。具体的にどういうことかといえば、おそらく三時間程度――実際の時間間隔は消失しているので同なのかは分からない――蹴って殴られ蹴って殴られを繰り返し、気を失ってはたたき起こされ、ぎりぎりになったら回復されるというシンプルなローテーションを縁縁繰り返されるということだ。ぎりぎりというのが何のぎりぎりなのかは考えたくもない。聖が浮かべたその笑みの理由も考えたくもない。

ただ、流石にこれだけ吹き飛ばされていれば吹き飛ばされ慣れる。慣れる、という表現が適切かどうか走らないが、とにかく慣れる。

両腕の骨が場牙気に折れていようが、両足に全く力が入らない軟体動物状態だろうが、脳が揺れて平均感覚がメトロノームのようになろうが、とりあえず受身は取れるようになった。それはこの参事官で得た格段の進歩である。

受身を取って前を見る。聖の姿は目視で十メートル程度の位置にある。聖は阪神を前に出す脱力下フォームでこちらをにらんでいる。ただし口元は笑っている。明らかに人をいたぶることに会館を覚えている表情だ。この女、真性のサディストである。人間のヴェールを剥ぎ取れば、たいていはサディストかマゾヒストの二種類に分類できる。分類できないのは真性の変体だけだ。

匠は文型なので、人間一人をけりでふっとバスだけのエネルギーがどれくらいのものなのかは想像するしかないが、少なくとも女子高校生が気軽にやって良いことではないことくらいは分かる。というよりも、人間が五メートルをらくらく跳躍したり、残像を残すほどの速度で移動するのはやりすぎだと思う。これでも手加減しているそうだが、加害者の主張なのでどこまで信じて良いかは疑問である。

「――げほ、っ」

「反応速度は良くなってるんじゃない。訓練の結果が出ているようで安心した」

「……これって、訓練？」

「それ以外の何に見えるの」

「住人が見たら十人ともが動くサンドバッグを殴っているのかと思うわ！　間違いないだろ！」

「自称サンドバッグってことで良いの？」

「もうどうでも良いから取り合えず肉体的指導を中止することを進言する」

「実戦は座学よりも吸収が早いわ。効率から言えば、こっちのほうがずっと短期間で済む」

「その前に俺の体が壊れそうなんですけど」

「大丈夫よ。あんた、ナチュラルでしょ。潜在能力から言えば、私なんて足元にも及ばない。だからマスターは、こうやって荒療治してるんじゃないの」
確かに体の傷や体力は恐ろしいほどの速さで回復する。これは自分がナチュラルだからなのか、それともデヴァイサーは皆こうなのかは分からない。どちらにせよ苦しむ時間が延びるだけのような気もする。
ここに来て始めて気が付いたことだったが、柿本聖は強烈な戦闘能力を持っていた。力や速さのような単純なものでもなく、基盤の上に成り立つ戦闘経験がマジ違った。それに気が付いたのは三回ほど気絶してからだった。
こちらがフェイントを交えようとすると、その上を行くフェイントを返される。もしかしたら本人はフェイントという意識をしていないかもしれない。そういう体の流れを、勝手にフェイントと解釈しているだけかもしれない。たとえば、下段の蹴りかと思えば拳での打撃だったり、回避かと思えばカウンターだったりする。些細な動きがこちらの心理をコントロールして、全体の流れを形作る。匠の貧相な戦闘経験では、全く太刀打ちできなかった。
今になって分かることだが、匠と聖とでは体のスペック的にそれほど差はない。もしかしたら、匠のほうが上位に位置するかもしれないほどだ。それは打撃の速度だったり、回避の側だったり、あるいは攻撃の重さだったりと、行動の端々から分かる。しかし、聖の行動は全てがつながっている。無駄なものはない。一見すると無駄なように見える動きでも、後になって考えれば、それによって今自分は攻撃を受けたのだ、と認識することができた。
「……もっかいだ」
「良いの？　そろそろ休憩しても怒らないよ」
「馬鹿にすんなよ」
そう言って匠は構える。その構えは、いつかのような見よう見まねの構えではない。たかが三時間の経験だが、その経験は匠のフォ

ームに明らかな変化を生じさせていた。ただ脱力するだけではなく、戦うための脱力、動くための脱力へ。力を抜くのはそれ自体が目的ではない。力を抜くことによって、相手の攻撃を察知しやすくしたり、行動の方向性をゼロにする目的でするのだ。いわゆる行動のリセットである。全方向に平等に対応するために、脱力というファクターが必要なのだ。

匠は駆け出す。二人の距離はそれほどはなれてはいない。すぐにインファイトになる。

右の拳はいなされる。それは知っている。一連の流れとしての打撃が必要だということは、もう散々体に叩き込まれている。

匠の拳をいなした聖の左腕は、匠に皿に接近するための手段に過ぎない。ゼロ距離の打撃が匠の腹部に迫る。右腕。それを匠は認識する。

身をそらす。かするだけならそれほどダメージは受けない。問題なのはまとまった打撃を受けることだ。それはすなわち、相手の意図した方法で、相手が考える効率の良い方法でダメージを受けるということだからだ。それを避けていれば、活路は見出せる。

かすった腹部に鈍痛が走る。それと同時、匠は聖の右腕を左腕で叩こうとする。打撃の直後は少なからず銃身が乱れるものだ。それは打撃店において顕著である。体重を乗せる、というひょうんげんからも分かるように、打撃の強さとはすなわち重さ、重心の移動からなる。

匠の打撃は聖の右腕に当たる。しかし意図していたように聖の重心は乱れない。むしろ匠の打撃によって生まれた加速度を利用して重心を更に下げる。回転力も生まれていた。それを利用しての下段打撃が匠の足首に迫る。

打撃の直後に硬直するのは匠も同様で、匠の体は一瞬の硬直状態にあった。足首に攻撃がされていることは分かっていても、それを回避することはできない。その直感はこの参事官で直感レベルまで高められている。だから、食らってから自分の体がどういう動きを

するのかだけに神経を集中させる。
匠の体は腰を中心にして回転する。聖は蹴りぬいた足の反動を利用して、更に拳での打撃を加えようとする。加速度を殺さないことは威力を殺さないこととイコールだ。
しかし匠もまた、聖がそうするだろうという予感は会った。回転する自分の体に打撃を加えるとすれば、有効面積が広い胸か腹。こういう状況で頭部に打撃が来ることはまずありえない。
聖の拳は匠の胸へと向かう。匠はまだ地面の感覚が戻っていない。回転の途中だった。地面に叩きつけられると同時、匠は打撃を食らうだろう。
その予測ができている時点で、未来は確定ではなくなる。匠は回転する自分の体が左半身から激突するということを判断し、左腕での受身を試みる。それと同時、右手で聖の打撃をいなすことに神経を分散させる。打ち勝とうと思わなければ、防御に神経を使うならば、難易度はそれに比例して下がる。中途半端な状態が一番良くないことは、経験的に分かっている。
パン、という軽い音。
匠は聖の打撃有効範囲から逃れ、自分の意思で受身を取っていた。そこへ追撃するには踏み込む必要があり、それは匠のカウンターに対する危険性が発生する。聖は行動をとめ、ゆっくりと体をゼロの状態に戻す。それは匠も同様だった。二人はまるで演舞を終えた後のように、静かにたたずまいを直す。
「やるじゃん」　それは始めての聖の賞賛の言葉だった。
「そりゃどうも」匠も素直ではない。ぶっきらぼうに返す。

それから数時間の間二人は戦い続け、出てきたときにはもう朝だった。丸々十二時間くらいこの中にいたことになる。
朝の店内は静かで、窓からは朝日が細く差し込んでいる。途中なんかいか休憩を挟んだとはいえ、匠は相当に疲労していた。今一番望んでいることは、温かいサワーを浴びて眠ることだった。

流石の聖も眠そうにあくびをしている。それにしても徹夜で訓練に付き合ってくれるなんて、意外にも気の良いところがあると思う。いや、ただ匠をいたぶる口実が欲しかっただけかもしれないが。
「……学校、行かなきゃ」
「お前、正気か？」
「私は一応、変人だけど優等生って言うポジションを守ってるから、学校には行かなくちゃだめなの。自分的に」
「それはまた面倒な縛りだな」
「普通だよ……ふぁあ」
何とも間の抜けた表情である。これほど仕官している聖を匠は見たことがなかった。とはいえ、この状態の聖にすら勝てる気がしないのは、一晩をかけて行われた肉体的指導の賜物か。
匠はふらふらとカウンターの裏へ行き、そこで横になった。
「ちょっと、そこ土足だよ」
「気にすんな、てか俺が気にしてないから良いんだよ」
聖は何か良い多層だったが、結局黙った。匠外字でも動かないだろうということを予感したからかもしれないし、単純に注意する労力を惜しんだからかもしれなかった。
「……とにかく、私は学校に行く」
「俺は寝る……おやすみ」
匠はそこで寝息を立て始める。聖はそれを見て溜息を一つ付いた後、店の扉を開けて帰っていく。

衝撃で起こされた匠が最初に見たものは、不機嫌そうな顔でこちらを見る筋肉達磨の姿だった。
「お前、ここはベッドじゃねえぞ」
「……今何時」
「十時過ぎだ。もう開店するからそこよけろ」
匠は眼をこすりながら立ち上がる。まだ体の節々が痛んだが、大部分は回復したらしい。自分の体のことながら恐ろしい。訓練の結

果、自己回復力も上がっているのか、ただ単に痛みに慣れただけか、そのどちらかだ。
（……ん？）
十時に開店、ということはマスターが来たのはそれより前のはずである。その間ずっと匠の姿に気が付かなかったというのはありえないだろう。ということは、このむさくるしいおっさんは寝ている匠をぎりぎりまで寝かせてくれたということではないのか。こういうところがあるから下手に逆らえない、と匠は一人呟いた。
「……ていうかさ、この喫茶店って平常営業してるの？」
「あたりめーだ。営業してない喫茶店なんて不自然以外の何者でもないだろうが。どこが隠蔽工作になってるんだよ。
マスターがここで喫茶店を営業している理由は、この街に無理なく溶け込むということが理由らしかった。しかし、店長がこんなで買い向き向きのおっさんだったら、街に溶け込むどころか帰って目立ちそうなものである。
「それにしては客が少ないような気がするんだけど。いつ来てもこの店、閉店してるみたいに人がいないし」
「……まあな、実際のところ、わけありの客しか近づけないように結界を張ってるから、あんまり目立ってないんだよな」
「なら俺を起こす必要はなかったんじゃ」
「開店時間と閉店時間は契約なんだよ。信用とプライドの問題だ。分かったらとっとと奥に行け。ここにだってシャワールームとソファーくらいある。そこで寝ろ」マスターはそこで言葉を切ってニヤリと笑う。「自分では気が付いてないかも試練が、お前、かなりぼろぼろだぞ」
言われて匠は自分の姿を見る。熱くて脱ぎ捨てた学ランは比較的無事だが、その下に着ていたワイシャツは匠の血で赤く濡れ、裾や袖が芸術的に破れている。はいていたズボンも摩擦熱で焼ききれ、断面が科学的な光沢を放っている。
「……あーあ、どうすんだよ、これ。俺一着しか持ってないんだけ

ど」
「ワイルドで良いじゃねえか」
「そういう問題じゃねーつの……」
匠はがっくりと肩を落としたが、そんなことよりも寝なおしたいという欲求のほうが強く、ふらふらと店の奥のほうへと歩いていく。
店の奥のほうは以外にも普通の家のようだった。キッチンとリビング、バスルーム。部屋の面積はそれほどでもないが、十分ここで暮らせそうである。少なくとも、ただ生活するだけで迷子になりそうな金持ちの家よりはずっと良い。
シャワールームに入り、ぼろぼろになった制服一式を脱ぎ捨てる。
（……？）
そこで違和感に気が付く。腹部のコアが、この前見たときよりも違和感がなくなっている。その様子は体に同化していくよう途中にも見える。今までのような、内臓がそのまま露出しているようなグロテスクな印象は消えていた。
多少は気になったが、別に急を要することでもないだろう。寝ておきてから覚えていれば、マスターに聞いてみようと一瞬だけ思ってすぐに忘れる。
シャワールームは安ホテルのもののように狭く、浴槽はない。しかしシャンプーやボディソープは備え付けられていた。それを見てタオルを持っていないことに気が付いて、体を洗うのは諦めてシャワーを浴びるだけで我慢することにする。
「いつっ」
体のあちこちが切れていて水がしみる。全身くまなくない出血しているようだが、これでもずいぶん回復したほうなのだ。場牙気になった状態から普通に歩ける用にまで回復したのだ。それを考えれば、明日になれば全身がきれいになっているだろう。
それにしても狭い。シャワーを取り回そうにも、少し腕を動かすだけで壁にひじが当たる。そのひじを負傷しているので、毎回鈍痛を味わうことになってあまり気分の良いものではない。最低限の汚

れを落としたと判断し、匠は早々にシャワールームを後にした。
体はボロボロになったシャツで拭き、裸の上に学ランを羽織る。これで少なくとも風邪を引くことはないだろう。
そのままふらふらとリビングへと歩き、ソファーに気絶するように倒れた。三時間程度の睡眠では、一晩蓄積された疲労は回復しなかったらしい。匠は泥のように再び眠りに落ちた。

＊

次の日、ボロボロの制服をごまかそうとして無駄な努力を重ねた挙句、結局諦めることになりやるせない気持ちのまま学校へと行く。
「……最悪」
考えうる限り最悪のコンディションだった。そもそも修行って何だ。馬鹿みたいに蹴られて殴られ手を繰り返しているだけじゃないか。自分が弱いからそうなっているということを棚上げして、匠は一人毒づく。
すれ違う人々が皆匠のことを二度見していく。それもそうだろう。ボロボロの学生服（下）にワイシャツ。シャツだけは替えがあったのできれいだったが、そのきれいさが見事に浮いている。上は学生、下はパンクロックといった感じだ。学ランの方は鞄にぐちゃぐちゃにして突っ込まれていて、それは昨日からそのままだった。それがまた何ともいえない反骨的な男子のオーラを演出している。なおかつ平然と歩いている男子といえば、相当に眼を引くだろう。
見慣れない他人ですらこれだったのだから、構内に入ってからの展開は推して知るべしである。
（聖、あの野郎……会ったら三回殺す）

と思ったところでそれが実現不可能だということを悟って憂鬱になる。同学年の女子にぼこぼこにされる男子という構図は、個人的にかなり納得行かないが、これが現実なのだからしょうがない。現実なんていうものはたいてい納得いかないものだ。

そんなこんなでつつがなく午前中を終えた匠は、いつもにまして周囲に人がいないことに気が付く。自分のオーラはとうとう他人にも目視できるレベルになったかと、嬉しいのか悲しいのか良く判らない気持ちになる。ああ、もう、とやるせない気持ちになって机に突っ伏した。

「やっほー」そんな匠に軽い声が掛けられる。

教室中の眼がこちらに集中するのを感じる。昨日からの訓練の結果、気配にだけは敏感になっていた。こういうところで津から割れるスキルでないことは確実ではあったが。

そしてその声の主は、今まさに怨念を飛ばしていた対象。

「……聖、てめえ」

「あんたさ、その格好で学校来る、普通」

「制服二着持ってる奴なんていねえよ！　こんなボロボロになるんだったら最初に言っとけって散々抗議しに行こうかと思っていた矢先に来てくれてありがとうこの野郎！」

「私のでよかったら着る？」

「頭蓋を叩き割って中身を調べる必要がありそうだなてめえ」

匠は拳を握って力を入れるが、そこはちょうど内出血している部分で鈍い痛みが走る。

聖の表情はやたらと楽しげで、何が楽しいのか全く見当が付かない。その「やってみれば」という表情をとっとと引っ込めろ。

「俺は毎日こうして皆に奇異の視線を向けられる日々を続けなくちゃならんのか……」

「それって、今に始まったこと？」

「そうじゃないが、何でお前は人事みたいに言ってんだよ。どう考えてもお前も当事者だろ。手言うかお前のほうがむしろ奇異の視線

で見られとるわ」
「そうかな」
「周りを見ろ周りを」匠は伏せていた顔を微かに上げて教室の様子を伺う。みな何食わぬ顔をして昼休みのひと時を過ごしているような幹事もするが、確実にこちらに注意を払っている。「どうすんだ世これ。ますます俺の教室での居場所がなくなるだろうが」
「そんなもの求めてたなんて初耳」
「求めてないが、居心地の良い日常生活は求めてる」
「ふうん……ならさ」聖は匠の正面に回る。こんな奴だっただろうかと匠はいぶかしむが、学校というコミュニティにおいては人の性格は変わるのかもしれない。いや、ぼこぼこにされた機能の記憶がまだ残っていて、それらが刷り込まれているから違和感を感じているのかもしれない。洗脳とはこうして行われるのか、と匠は遠い眼をする。
「おーい、どこ行ってんの」
「……何だよ」
「だから、買ってあげるよ、制服」
「……は？」
「要するにあんたは一人暮らしで、すなわち金が無いことを嘆いているんでしょ」
「ぶっちゃ蹴ればそうかもしれない」
「だから私が買ってあげる。……て言うかさ、マスターに言って制服もらえば良いのに」
「あの筋肉ダルマが高校の制服なんて持ってるわけねえだろ」
「そうじゃなくて、ＡＤの制服。頑丈なことで評判なんだよ。動きやすいし」
「……そんなのあるのかよ」匠はがっくりと肩を落とす。それがあればこんな目立つ必要は無かったのではないか。
「でも、マスターの店は地方支部だから、征服を余分においてるかどうかは疑問だけど。あんまり期待しないほうが良いかも」

「いや、今度聞いてみる。襟首つかみながら」
「多分襟首つかみ返された後脳天から叩き落されると思うけど」
匠は黙る。その光景がリアルに想像されて寒気がした。そもそも、あの筋肉で格闘技なんて仕掛けられたら犯罪である。明らかに殺傷を目的としている。客観的に見れば間違いなくそう移るだろうし、当事者としても同意見である。
「てか、話がそれてる。行くの、行かないの」
「行くに決まってんだろ。制服いくらするか知ってんのかお前！」
「はいはい」
「て言うかお前一人で行って俺に届けるべき状況なんじゃないのか、これは」
「双方の合意の下で訓練してるんだから、あんまり調子に乗るんじゃないわよ。大体、あんたの制服のサイズなんて私が知るわけないでしょ」
そういわれてはぐうの音も出ない。確かにその通りである。嫌がラサにやたら小さい制服を買ってきて、無駄になったから金を払え、なんていう展開はこの女ならやりかねない。
「じゃあ校門で待ってるから」
そう言って聖は出て行った。分かれるときやたらあっさりしているのがこの女の特性なのかもしれないと匠は思い始めていた。
その後、匠に向けられる奇異の視線の密度が増したことは言うまでもない。

「……なんでそんなにぐったりしてるの」
校門で聖と出会い、開口一番の言葉がそれだった。匠は精神的になかなかのダメージを受けていて、正直凹み気味だった。
「……俺がこんなに周囲の空気を読んでいたなんて知らなかった」
「もともと浮きまくっていたあんたが言うもんじゃないな、それ」
「昔な、中学生くらいかな、クラスメイトのグループがさ、テストの話してたんだよ。何でお前はそんなに点数良いのに落ち込んでる

んだって。そしたらそいつ、自分にとっての基準とお前らの基準は違うって言ってた。それを思い出すぜ。食う清めない奴にも限度があるだろ。針のむしろ状態だわ！　いっそ無視しろっつーんだよ！」
「大変だねえ」
「原因はお前にもあるってことをここで強調しておく」
　幸い六時間授業の日であったので、外はまだ明るい。匠も聖も部活動なんてやっているはずも無いので、帰宅部の学生に混じって待ちに出る。そこまではたいていの生徒が同じ道を通っていくので、さながら高校校舎から吐き出された第一波という形だ。街の中央に面する道に来れば、後は皆思うがまま、自由に行きたい場所へと散っていく。
「……つーかさ、制服ってどこで売ってんの。なんか最初買ったとき、やたら面倒だった記憶があるんだけど。寸法とか注文とかもろもろで」
「大丈夫じゃない、多分。だってその残骸があるんだから、寸法についてあれこれやられる必要は無いだろうし、ただ在庫にあるかどうかは問題だけど。ここら辺だったら、近くのでかい店に適当に入れば売ってるでしょ」
「そううまくいくと良いけどな」
「そもそも買ってもらう当人がそういうことは調べるもんじゃないの。それ以前に入学するときに買った場所を覚えていれば手っ取り早いし」
「そんな機微を俺に求めるか。指定された場所で注文してとりに行くだけだったっつーの。そんな記憶に残りにくい条件化で正確な場所を覚えておけって言うほうが無理じゃね」
「馬鹿には無理かもね」
「うるせえ変人」
「変人にだけは言われたくない。同属嫌悪だとしても、それはそれで更に嫌かも」
「俺のこと変人変人って連呼してたのはお前だろうが！」

そんなこんなで店を見つけるまでに体力の大部分を消費した二人は、近くにあったデパートに入る。店は出かければでかいだけ確率が上がるだろう、という予測にのっとっている。

ちなみに匠は買い物をこういうところにしにくることは滅多にない。多少高くても、近くのコンビニでインスタント食品を買う。体に必要なのはブドウ糖で、それはすなわち炭水化物だ。それならカップめんで十分事足りるだろうというのが彼の主張である。

制服も服の一種だから、売っているとすれば福家のコーナーだろうとあたりをつける。そこに行く途中、聖もあたりをきょろきょろしていたから、こういうところに来ないのは聖も同様なのかもしれない。

幸いにしてその予想は当たり、制服の再注文はそれほど大きな問題は無く住んだ。ぼろ簿ｒの征服のサイズを確認しながら注文したので、店員からはかなり白い眼で見られた。今日一日で一笑分の白い眼を浴びたような気がする匠である。

匠が注文の手続きをしている間、聖はその辺をふらふらとしている。どうやら洋服を見ているようであった。その姿をみて、初めて聖が同級生の女子生徒だという実感が持てた。

「商品が到着したら連絡しますので」

「あ、はい、ども」

そんな会話をしてカウンターを後にする。聖の姿を探すが、眼の届く範囲にはいないらしい。姿を探して歩くが、どうやら奥のほうに行ってしまったらしく、外側からでは全く見つけられなかった。どうするか考えたが、毛局聖を探して店の奥のほうへと入ることにする。というよりも、聖はここにくる必要は無かったのではないか。料金が後払いである以上、匠一人で事が済んだはずである。そのことを聖が知らないとは思えないのだが。単純に気まぐれだったのかもしれない、と匠は勝手に判断する。

以外にも聖は簡単に見つかった。カジュアルな服が売られている一角に聖は立っていた。その姿は旗から見れば百パーセント普通の

女子高校生にしか見えない。どこをどう踏み間違ったらこんなことになるのか点で見当が付かなかったが、その点に関しては匠も人のことをいえないので保留することにする。
「聖、終わった」
「ああ、うん、ちょっと待って」
聖は偉く真剣な顔で服を眺めている。この一角は女性向けの服が中心に置かれている一角だったので、匠はかなり落ち着かない。そもそも今日の匠の格好はただでさえ眼を引くのだから、こんなところにいては、相乗効果で存在感が出まくりである。個人的な希望を言わせてもらえば、一刻も早くここから立ち去りたかった。
「聖、早くしろ」
「うっさいわね、金払うのはこっちなんだからちょっと暗い待っててくれたって良いでしょ」
それを言われると弱いので匠は黙る。買い物が終わるまで近くのベンチに座っていようか、徒も思うが、そもそも聖に合わせてここに留まる必要も無いのかもしれないと思い直す。
「俺、帰っていい？」
「だめ」
「何で」
「別に理由は無いけど、普通、ここで一人で帰りたいとか言う？」
何が普通で何が普通でないのか匠には分からなかったが、確かに損なような気もしてくるから不思議なものだ。仕方が無いので匠がベンチを探しに歩き出そうとすると、聖が「うん、これに決めた」と一着の服を持ってカウンターへと歩き出した。どうせなら最後まで付き合うか、と匠は聖の後について歩き出す。周囲から感じる奇異の視線はまるきり無視する方針を固めてからの話だったが。
「いらっしゃいませー」
この挨拶は標準語であるかのようにどこに言っても同じである。しかしこの声、どこかで聞いたことがあるかもしれない、と匠は顔を上げる。

「「あ」」
声がハモる。聖は何のことだか分からないように、匠と店員の姿を見比べている。
「匠君じゃん。こんなところで会うとは思わなかったな」
「それはこっちの台詞っすよ、蛍さん」
そこにいたのは秋峰蛍だった。デパートの征服に身を包み、立派にレジ内の一人としてそこに存在している。かけているメガネはむしろ征服の一部であるかのように溶け込んでいる。明るい茶髪もむしろ「お姉さん」な空気をかもし出していて好印象だった。ファミレスよりもこういうところの方がよっぽど似合っている。
「巧君に彼女がいるとは思わなかったな」
「否定するのはかなり悔しいんですけど、こいつは俺のなんでもないです。ていうかあってほしくないです、はい」
「……本人を目の前にしてずいぶんな言いようじゃない」
「双方の利害を考えての応答だ。ていうかお前にデメリットはないだろ。俺なんて自らかの除外なさそうって言うあなたの予想は正しいです、って肯定しなくちゃいけないんだぞ」今日一日での精神的なダメージ量がかなりのものになっていることを匠は感じていた。
「あら、違うの」
「ＡＤのもう一人の方っすよ」
「ああ……てことは、柿本聖さん？」
「あなたがうちの街に来た援軍の人？　……まいったわね、こんなところで会うなんて思わなかったから、全然会話のストックが無いわ」
「いらないよ、そんなもの。人間の第一印象は見た目だもん。聖さん、第一印象はかなり良好だよ」
蛍は微笑む。まるでその言い方だと、匠の第一印象はかなりよろしくないと言外に言われているみたいで、匠は軽くへこんだ。今日はへこんでばっかりである。
「あっと、仕事しなきゃ」

蛍は慣れた手つきでレジスターを操作し、タグを切る。それから店のロゴが入った紙袋にそれを入れ、両手で手渡す。完全に板に付いた店員の姿だった。
「どうもありがとう」聖はどこかぎこちない手つきでそれを受け取る。こういう場所にあまり来たことがないのだろうか、という匠の見立ては、どうやら当たっているようだった。その様子を見て、蛍はにっこりと笑う。母性を感じさせる笑みだった。
「あの、私後十分くらいで上がりなんだけど、良かったらうちに来ない？　あんまりきれいなところじゃないけど。同じＡＤの仲間なんだから、親睦を深めるなら早いほうが言いと思うの」
「それはそうですね。匠、いいよね」
「あ、ああ」聖の余所行きの言葉に相当な違和感を感じながら匠は答える。
　というよりもかなり異質な状況になりつつ花井だろうか。女性二人と男性一人の比率は、一般に両手に花というのではないのか。聖は良いとしても、蛍は年上の女性である。あまり意識すると返って変な行動を取りそうで自重しようとするが、そう思えば思うほど動作がぶれていくというのはある意味お約束である。
「じゃあ、ちょっと待っててね。私の家近いから、そんなに歩かなくても良いの。帰ったら何かご馳走するね。何かあったかなあ……」
　そう言って仕事に戻っていく店員、もとい蛍を二人で見送る。
「良い人そうだね」
　歩きながら行った聖の言葉浜をいている。かなりの良い人であることは少ない会話からでも容易に分かる。前身からにじみ出ている良い人オーラは二人の共通見解らしい。
「確かに、良い人だけど、多分、結構厳しい人だと思うよ」
「根拠は」
「この前一緒に仕事をしての感想」
「ああ……」聖は納得したといった風に頷く。「そういえば匠はもうあの人と一緒に仕事してるんだもんね」

「あの人が居たから助かった」
「そりゃ、あんたはまだ新人も良いところなんだから、しょうがないでしょ」
「……そう、なのかな」
その新人という安易な響きに逃げても良いものなのか、今の匠には判断が付かなかった。

家があまり大きくない、という蛍の話は謙遜だろうと思っていたが、どうやら事実のようだった。
大きくない、というのはある意味し方がないと思う。二人が連れてこられたのはアパートだった。それなりに年季の入った外観をしているアパートを見て一瞬動きを止めた二人に言い訳するように、「あまりお金持ちじゃないから」と蛍は恥ずかしそうに言った。そういう意味で黙っていたのではないと主張しようかと思ったが、それを言ってしまっては気にしているといっているのと同じことだろうと思い、言い訳することは自重しておいた。
アパートの立地としてはそれほど悪くはない。都市開発が進んでいる中心街から少し外れたところにある。中心街予定地の一つとして発展されかけたが、大人の事情で放置された一角の一つだろうと匠は判断する。
外につけられた階段を上がるとき、ぎしぎしと不吉な音を建てたのは聞かなかったことにする。今日の匠は相当にアンラッキーなので、下手に意識したら階段そのものが落ちるなんていう結果につながりかねない。平然とあがって言う聖を恨めしげに見るが、聖は涼しい顔をしたままこちらを見ようとはしなかった。
「汚いところだけど、くつろいでいって」
そう言って通された秋峰聖の資質は、きれいに整頓されていた。一人暮らし特有の、雑貨があふれかえっていたりとか、床にカップ麺の殻が転がっていたりとか、買い物のビニール袋が産卵しているということは無かった。きれいに整頓されている。あせたフローリ

ングの床の上にはカーペットが敷かれ、その上に明るい茶色のテーブルが置かれている。リビングのすぐ向こうにはキッチンがあったが、そこもきれいに片付いていた。この整理整頓の徹底振りは、性格を表しているのだろう。資質がぐちゃぐちゃの魔窟になっている匠としては、実に見習うべき姿勢である。

「きれいな部屋ですね」

「外観が汚い分、……って言うのはうそで、汚いと落ち着かないの。きっと神経質なんだね」

「いや、良いことだと思うっす、はい」

「あんたの部屋は汚いんでしょうね」

「偏見だぞ変人」

「事実でしょ」

「……ぐ」

部屋が汚くて何が悪い、と抗議したかったが、現実問題部屋が汚いというのはあまり良い状況ではないだろう。一人暮らしで清潔な状態を維持している人間というのは、きっと自分とはどこか頭のつくりからして違うのだと思う。匠の部屋はカップ麺の殻は転がっているし、コンビニのビニール袋も散乱している。古雑誌も結構な数になる。ただ、汚くないと落ち着かない、という人種が確実にいるのだという事実をここに明記しておかなければならないだろう。匠はその典型である。

「えっと、お茶とお菓子と……」蛍は部屋に着くなり荷物を置いてキッチンへ向かってしまった。手伝いましょうか、といおうかどうしようか迷ったが、相手が年上の女性ということも会って躊躇してしまう。妙なところでチキンな匠だった。

程なくして蛍が戻ってくる。トレイに乗せたカップからは紅茶の香りがした。「パックで申し訳ないけれど……」と蛍は申し訳なさそうだったが、普段珈琲ばかり飲んでいる二人にとって、珈琲以外の飲み物ならなんだって新鮮である。

「あの、お菓子は無かったの、ごめんね」

「匠、あんた買ってきなさい。すぐそこにあるでしょ、何か」
「そりゃ何かはあるだろうよ。すぐそこは中心街だ。むしろ何も無いほうが驚くわ。ていうかなんで俺が買いに行かなきゃならんのだ」
「あんたが一番暇そうだから」
「そういうのを客観性の欠如って言うんだよ。そんなんだから現代の若者はコミュニケーション能力がないとか言われるんだ」二つの主張は相互にかみ合っていない。
「あんた、女性にパシリさせるつもり」
「パシリっていう自覚があるならもっと誠心誠意頼めよ」
「そういう誠意が無いからパシリって言うんでしょ」それは確かにその通りである。
「あの、申し訳ないから私が……」
「「いや、それはないですから」」こうなると二人ともどちらかに面倒ごとを押し付けるまで争いは終わらない。全く不毛である。この時点で目的と過程は摩り替わっていて、つまり、面倒ごとを押し付ける、というのがゴールで、その結果お菓子が食べられるというのはおまけに過ぎないのだった。
　無為に時間が過ぎ、カップからティーパックが取られたころ、匠と聖はこの良い争いが全く不毛であるということにようやく気が付き、しぶしぶお互いに矛を収め、じゃんけんという平和的方法でどちらがお菓子を買いに良くかということを決めることにする。
　匠はパーで、聖はグーだった。
「お、勝った」
「……あんた、こういうときだけアンラッキーは発動しないのね」
「もう一日分使い切ったってことだろ」
　聖は舌打ちしかねないような苦々しい表情で立ち上がって、「そういうわけで、ちょっと行って来るので待っててください」と捨て台詞のように言い残して出て行った。
　聖が出て行ったところで気が付くが、この状況はかなりやばい。何がやばいって、一体どうしてこんなことになったのか分からない

程度にやばい。あまり進行のない女性と同じ部屋で二人きりというのは、会話の観点から見ても、単純に以後心地のよさから行っても、結構ハイレベルな状況だと思う。こんなことなら自分がかい出しに聞けばよかったのだが、言い争っているときにその先のことを考えているはずもない。こうなることは自然な結果だともいえた。

沈黙が痛い。時計の針の音が聞こえる。何か会話を切り出そうと頭を絞っていると、

「匠君はどうしてＡＤに入ったの」

「ああ、いや、自然な成り行きでって言うか……」

「成り行き？」

「ああ、俺、ナチュラルらしくて、そのまま野放しになってたら危険だからって殺されてたら新ですよ。でも、そこをマスターに拾われて、ってあれ、意外とマスターって良い人なんじゃ」

匠が自分の言葉で勝手に完結していると、蛍はくすくすと笑い声を上げていた。怪訝な顔で匠が見ると、蛍は「ごめんごめん」と言って、

「まだあの人は自分のことを本名で呼ばせないんだなって思って」

「知ってるんすか、マスターのこと」

「本州にいたとき、一時期私の上司だったんだ。もうそのときから、俺のことは本名で呼ぶなって言ってた。こっちは書類まわされてるんだから、名前なんて知ってるのにね」

「俺、いまだにマスターの本名知らないっす」

「あらら、……知りたい？」

「いや、どうだろ、別に知らなくても不都合ないし。知ったら知ったでうっかりこぼしちゃいそうだから、聞かないどきます」

「それが良いかもね」蛍は紅茶を一口飲んだ。

匠もそれに習って紅茶を飲む。そういえば聖の分の紅茶ももう入っている。冷めた紅茶を飲ませることになるのは少しかわいそうかな、戸も思ったが、匠が言ったらそれはそれで自分にその役割が押し付けられるだけである。この場合、必ずどちらかが不幸な目にあ

う。こういうところが不毛である所以である。
「にしても、相変わらずなんだよね、見ず知らずの人なのについ助けちゃうお人よしなところは」
「……実は、本当に良い人？」
「私の知る限り、あんなに善良なＡＤのメンバーは知らないな。あの人はさ、取り合えず助けてから、さて、こいつをどうしようか、って考えるタイプの人なんだよ。自分でもそれが分かってるから、あんまり積極的に人助けをしようとはしないけどね。でも困ってるってことを知っちゃったら、その人を助けずにはいられない性格なんだよ」
　匠は曖昧に頷いた。これまでのマスターの言動からそのことはなんとなく察せられたが、正面切って認めるのがなんとなく恥ずかしかったというのもある。この得体の知れない反発心は何なのだろうか。思ったことを素直に表現できないこれは一体。
「あの人についていけばあ、多分悪い人にはならないよ」
「だといいんすけど」
「割と世話好きなところもあるしね。なんだかんだで、面倒見てくれると思うよ。前回の一軒で、君の力もある程度は認めてくれただろうし、それに見合った知識を教えてくれると思う」
　それらしいことを言っていたことを匠は思い出す。蛍がマスターと旧知の仲であるという確信はこの時点でようやく得ることができた。基本的に疑り深い性格であると自己分析している。
　それから数十分の間、たいした会話もなしに二人は紅茶を少しずつ飲んだ。それでも、聖が帰ってくる前に全て飲み干してしまう。匠はテーブルに置かれたデジタル時計を見る。聖が出て行ってから、三十分程度経過していた。近くに店があるのだから、少し遅いといえるかもしれない。
「……遅いね、聖さん」
「そうっすね。まあ、あいつに限って面倒ごとに巻き込まれてるってことはないでしょうけど」

「なに、トラウマでもあるの？」匠の即答する様子に違和感を感じたのか、蛍はいたずらっぽく微笑しながら聞く。
「いや……まあ、あの、訓練と称してサンドバッグにされたことが精神的にきてるなんてことは、俺に限ってはないと思います、はい」
「ああ、マスターの別位相空間でのあれね。真っ白な空間の奴でしょ。私もやらされたわ。体が頑丈なのが恨めしいよね、あれ」
まさかこんなところに理解者がいるとは思わなかった、と驚く反面、あの筋肉ダルマは女性にも容赦しないということが分かって、匠はマスターの善性を再び疑うことになる。密室に二人きりというのはこの場合、殺人事件の洋館での密室に二人きりのニュアンスに近く、つまり死亡確定といった意味合いだ。同級生の女子にぼこぼこにされる自分の姿がフラッシュバックして、匠は頭を振ってその映像を追い出す。
「にしても本当に遅いね」
確かに蛍の言うとおりである。菓子一つ買うのに三十分とは不自然だ。もしかしたらホールケーキの類を注文して待たされているという可能性も無いわけではないが、あの聖に限ってそれはない。
探しに行こうかと立ち上がりかけたとき、
唐突に、
空気が変質する。
暖かかった空気に冷水をねじ込んだような違和感。明らかに自然ではない寒気が肌を伝って脳をしびれさせる。
「――これは」匠は異質な感覚に反射的に体を硬直させる。
「メンタルシフトの気配、か」穏やかだった蛍の表情も引き締められ、今までのやわらかい雰囲気は息を潜めた。
「何なんです、これ」
「第一階層に影響が出るかもって時に感じるもの。現実に無理やり影響しようとしているから、多分階層そのものが拒否反応を示してるんじゃないかって勝手に思ってるけど」
「予感みたいなものですか」

「そう思ってくれてもかまわない。……どうするかな、って、どうするもこうするも行くしかないんだけど」
蛍はそう言って立ち上がる。匠もその後を追うようにして立ち上がった。
カーテンを開けて窓から外を見る。外はもう暗く、日は完全に沈みきっている。
「気配の個数とか分かるんすか」
「二つ、かな、あんまり自身はない。私のこれは殆ど直感に近いから。漠然とした気配は感じ取れるけど、その詳細は分からない。曇りガラス越しに対象を見ている感じ」
「俺なんて何かあるってことしか分からないっすよ」
「感じ取れるだけでも十分だよ。結局、当たってみないと相手がどんなのかなんて分からないんだし。私たち現場の人間は、方角さえ分かれば後は何とかなるよ」
蛍と匠はアパートを出た。冷たくなり始めた夜風が頬をなでる。空は曇っていて星は見えない。心なしか空気が湿っているような気がする。一雨来るかもしれないと匠は思った。
「雨が降る前に終わらせたいね」蛍も同じことを思ったのか、空を見上げながら呟くようにして言う。「近いほうの気配、分かる？」
「近いほうかどうかは知りませんけど、あっち側に気配があるのは分かります」匠は中心街の咆哮を指差す。相変わらず遠くからでも街の明かりが分かる。雲に反射して夜空が一部分だけ明るくなっている。
「じゃあそっちが巧君の担当ね」
「俺、結界の張り方とかまだ知らないんすけど」
「多分そっちに聖さんがいるから、合流することになると思う。彼女なら一通りの対処ができると思うから、巧君は彼女をサポートしてあげて」
「それは良いですけど、蛍さんは」
蛍はいたずらっぽく笑って「私は一人で大丈夫」

匠も実際に蛍の戦いぶりを見ているので大丈夫だと判断する。匠十人分くらいの働きは平気でするだろう。
「じゃあ、行きます」
「とんだお茶会になっちゃって、ごめんなさい」
「それ、謝られても困りますって」
笑い合って二人は走り出す。第一階層では目立った身体能力の強化は望めないので、匠の速力は一般的な男子高校生とそれほど変わらない。多少体力が付いたような気がするが、その程度だ。第一階層は感情のような不確定なエネルギーが存在するには、あまりに物質がはっきりしすぎている。感情が入り込む余地が無いから、第二階層へと逃げ込むのだろう。結果、たまりにたまった感情エネルギーが結晶し、第一階層に影響を及ぼすのだから、問題を先送りにしているだけである。
匠の息が切れるころには、中央通に面した横道に到着していた。気配はそこからする。それなりに多い通行人も、その一角だけは自然に避けて歩いていた。そのことで匠は確信する。
濃密な気配のするそこに足を踏み入れる。その瞬間、匠の姿は第一階層の人間の目からは近くされなくなる。誰も、そこに人がいるだなんてことは考えもしないかのように、ごくごく自然な足取りで、そこの空間自体が存在しないかのように歩き続けていた。
匠は目を閉じる。一度やったから、イメージ自体はたやすい。ただ、今回は回りに誰もいない。頼れる人間は自分しかいない。
でも、これから先マスターの元で働くには、これくらいのことができないと話にならないことは分かっていた。
集中する。
今まで使っていた日常的な神経を切り離して、第二階層の感覚に自分の内側をチューニングする。摺り寄せ同化させるイメージ。
その後は、跳躍のイメージ。
地面を離れる体。
層を抜ける。

感覚は覚えている。
後は理性をそこに付随させるだけだ。
（行け――）
体中を分厚い空気の層を突き破ったような鈍い衝撃と共に、周囲の気配そのものが変化した。

抽象的なエネルギーの存在が許された、第二階層。
相変わらず生命の気配がない。そこでは人間というか立ちあるものが異質なのだ。オブジェのように立ち並ぶ街並みも、生物の存在を完全に拒絶している。
「さて……」
匠は周囲の状況に気を配る。ポイントとしてはそれほど間違ってはいないはずだった。気配の中心点をしっかり確認したわけではないが、分散した気配の一つには接触できているのだから。
そして、これだけ分かりやすいのなら、聖がすでに第二階層に入っているはず。戦闘の気配を探すだけで良い。
（――見つけた）
微かに音がする。戦闘というにはずいぶん静かな音だ。思ったよりも離れている。
匠は両足にエネルギーを集中させる。腹部のコアが一度ドクンと脈打った。両足に力が満ちる。第一階層では一般人だった内匠だが、ここでは違う。呼吸する場所を見つけた人間のように、水を見つけた魚のように、自然な流れで体を動かすエネルギーを変質させる。匠の体を動かすのは物理的なエネルギーではなく、感情がこぼれてできた断片だ。
次第に戦闘の音が大きくなる。壊し、えぐる、腹に響く低い音だ。匠は更に足に込める力を挙げる。単純な速力なら自動車に迫る速度だろう。
およそ三十秒ほどで現場に到達する。匠はまったく息を切らしていない。

そこでは相対する聖とメンタルシフトの姿がある。
聖は周囲に武装を展開している。彼女のデヴァイスなのだろう、細やかな装飾が成された鈍色の細い棒が数十本、彼女の周りをゆっくりと回転している。それらの内の一本を掴み、彼女は隙のない構えでたたずんでいる。匠も曲がりなりにも戦闘訓練を受けたから分かるが、今の聖に攻撃を当てるのは相当に難しいだろう。攻撃を聖に当てるイメージをどの方角から仕掛けても、最終的には彼女に手痛いカウンターを食らって吹っ飛ばされる未来しか見えない。
そんな彼女と相対しているメンタルシフトの姿は、人型だった。最初に匠が遭遇したメンタルシフトにかなり近い。ただ、前回の奴とは桁外れに存在感が違う。黒いフードをかぶってうつむく姿は死神のようで、根源的な恐怖感を呼び起こす。あまり見ていて気分の良い外見ではなかった。少しでも隙を見せれば、首と胴が分離してしまいそうな不吉な殺気をばら撒いている。
「匠？」聖がこちらを見ずに言う。
「ああ」匠はゆっくりと聖の横に並ぶ。右手には展開した彼のデヴァイス、剣の形をとった感情が顕現していた。
「速いけど軽い。普通にやれば負けることはないと思う。サポートお願い」
「どっかの牛丼屋みたいだな」
「牛丼は重いでしょ」
その軽口はシフト。体を戦闘状態に持っていくための予備動作。
迫り来るメンタルシフトを聖が計激する。メンタルシフトがかぶっていた布の内側から刃が引き出される。ファンタジーの暗殺者が使うような小ぶりのナイフだ。鈍い光沢を持つ刀身は微妙に反っている。
翻る刃を聖は冷静に裁く。長い棒が羽のように軽やかに動く。聖の周囲に展開していた棒もまた、それぞれが独立したいしを持つように動き始める。
メンタルシフトは空いている手にもう一本のナイフを持つ。二刀

を持つ格好だ。それぞれで冷静に聖の棒をさばいている。匠はそれぞれの動作に隙がないか、一定のパターンが無いかを探る。これは聖との訓練の途中で会得した、相手の攻撃を予測するための第一段階だ。

（確かに、速い）

そこだけは認めざるを得ない。たった二本のナイフで聖の攻撃を裁いている。聖も手を抜いているわけではないだろう。こと防御能力に関して言えば、あのメンタルシフトは匠よりもずっと格が上だ。

聖が作り出した隙に、確実に攻撃を割り込ませなければならない。それができなければ匠が今ここにいる理由がない。全くの役立たずになってしまう。匠は右手に意識を集中させる。それと平行して、両足にいつでも飛び出せるように力を分配する。大賞まで接近できれば良い。件が届く距離まで接近できれば、その後のことを考えなくて良いのが気楽だった。それが聖との訓練と一番違う点であった。

誰かと共闘するということはこんなに楽なのかと匠は思う。体重を預けられる誰かがいるということは、こんなに心地が良いことなのかと実感する。

（こんな雑魚、手間取ってる訳にはいかないわな）

一人なら困難でも、二人ならやれる。

二人分の柔軟さと、二人分の強靭さを兼ね備えられれば理想だろう。そういう人間関係を目指して、いろんな人が友達をとっかえ引返しているのかもしれない。だけど、自分と他人との摩擦が大きくて、結局諦めてしまうのだ。他人と信頼を結ぶということを。

この感覚は幻想だろうか。他人と意識を共有しているなんて言う、この感覚は。

相手を無条件で信じることは愚かなのは分かっている。なら、根拠のない衝動に身を任せて相手を信じるのも、愚かなのか。

きっと、そうなのだろう。

でも、愚劣ではあっても醜くはないと思う。

相手を信じるから、自分も信じられる。そうして螺旋のように高

まっていって、その過程で多くの仲間を得るのだろう。
聖の棒がメンタルシフトのナイフを捕らえる。金属質な音と共にナイフが中二枚、メンタルシフトの体は大きく崩れる。それは聖も同様で、一連の流れはそこで終わっている。聖の今の行動の最終目的は、相手の行動を乱して決定的な隙を作ること。
そこに攻撃を入れてくれるという信頼。
信頼されるというのはくすぐったいほどに心地が良い。
匠は駆ける。ためた力は接近さえできれば良い。一秒とかから図に大賞に肉薄する。そのときにはもう右腕は振りかぶっている。
生物共通の急所。頭部。
ソリッドな感情はメンタルシフトを二つに分かち、霧散させた。

「何でこっちにきたの」
第一階層に戻ってきての聖の第一声がそれだった。不満なのかどうなのかは知らないが、匠と目を合わせようとしない。そんなに不満だったか、と匠は内心傷ついたりもする。基本的にはナイーブな少年である。
「来たら迷惑かよ」
「迷惑」
「うわ」
ばっさりというあたりが聖らしいといえばそうなのだが、仮にも応援に来てくれた味方に対してその言い草は無いと思う。とはいえそこまで怒る気にもならない。それを個性と受け入れてしまえば楽しくもある。それは問題のすり替えとも言うが。
「……ケーキ、買えなかった」
「どうでも良いんじゃね。つーか蛍さんも助けに行かないと」
「大丈夫よ」
「あ？」
「気配はもう消えてるもの。私たちよりも早くね。私たちよりも遠くのポイントで、しかも一人で、私たちよりも速く仕事をこなすっ

て、ねえ、ちょっとプライド的にどうなの、これ」
「俺は新人だしな」
「あんたはもっと矜持を持ちなさい」
「やだよそんなもん、身が重くなるだろうが」
「それが成長ってものよ」
冗談っぽく聖は言った。実際本心はどうなのかはわからない。ただ匠の意見を言えば、できるだけ身軽に生きたいとは思う。余分なものを切り捨てて、硬質に。
友情は余分なものだろうか。
感情は？
「……ケーキ買ってもう一回お邪魔しようぜ。このままだと後味悪すぎだしな」
匠の提案に聖は以外にも素直に従った。誰かと買い物をするのも今日が初めてだったし、誰かと夜の街を歩くのも初めてだった。余分なもので得られるものもあるのか、と匠は一人思った。

第四章

例の白い空間で行う修行というなの拷問もそれなりに効果が出始めていると実感し始めた。最初はただただ圧縮された時間が無限に続くかのように長く感じられたが、それも回数をこなすうちに余裕に似たものが生まれ始め、すぐにそれが錯覚だと分かり、そのローテーションを十回繰り返すころには、いくらかましな対応が取れるようになってきたと思う。

相変わらず体術だけの訓練で、いまだに聖には一度も勝てていなかった。なぜ体術の訓練なのかといえば、デヴァイスを使った訓練はあまりに殺傷能力が高すぎて危険すぎるからだ。それに、体術とは言ってもそれは結局はエネルギーの効率の良い運用方法を学ぶということだから、体術のスキルが向上すれば、結果的にデヴァイスの精度も上がるという寸法だ。

匠も聖も学生の身分に甘んじているので、訓練は夕方からしか開始できない。それに、飲まず食わずで戦い続けるわけにも行かないので休憩時間が入る。夜通し戦うのは無理があるとお互いに判断したので、訓練の時間は一日三時間ほどで安定した。最初の時間よりは減ったと入っても、肉体的な疲労はそれまでの毎日とは比べ物にならないほど大きかった。それは聖も同じはずなのだが、見た感じそれほど喫そうという印象もない。もしかしたらやせ我慢なのかもしれないが、本当に何も思っていないのかもしれない。匠の男としての些細なプライドが、彼に疲労を表に出すことを禁じていた。全く意味のないプライドである。表に出そうが出すまいが、訓練のメニューは聖が決めることで、それはいついかなるときでも不動だということとイコールだったからだ。

「……朝日がまぶしい」

一瞬自分がどこにいるのか分からなくなる。目の前には知らない

と言い切れなくなり始めた天井が広がっている。一瞬のめまいのようなものを感じるのは、自分がソファーで眠っているからかもしれない。

匠は体を起こす。そこは珈琲茶の奥にあるリビングだった。おそらくマスターが今までは使っていたのだろうが、匠に気を利かせて今はいない。マスターはこの街にいくつか家を持っているらしく、ここが使えなくなったからと言って、別のところに住めば良いというようなことをほのめかしていた。学生の身分からすればありえないことである。こんなところでも社会人と学生の社会的地位の格差を感じつつ、匠はまだ眠っている頭を引きずるように洗面所に行き、のろのろと顔を洗った。

流石に食事は自腹である。通学途中にコンビニで弁当を買うのが最近の流れとなっていた。食べられるかどうかは匠の都合的に五分五分である。都合というのは、口の中の傷が治っているかどうかということだ。傷が酷ければとてもじゃないが食事をとる気にはならない。塩分は傷口に激しくしみるのだ。とはいえ、もともと口の中は傷の直りが早いということもあり、デヴァイサーである匠は一日と経たずに全ての傷が完治してしまう。そのためこの傷が原因で餓死をするという事態には今のところ陥ってはいない。

壁にかけられた時計を見ると、七時二十分を少し回ったところだった。学校までは徒歩で二十分ほどなので、今から出れば朝食をとるくらいの余裕はありそうだ。匠はその辺に放り投げていた制服を着て（今まで着ていたのは極力どうでも良いと思われるジャージの上下である）、鞄を持って外に出た。

外はあきれるくらいの晴天だった。秋口ということもあり、空が高く見える。そろそろ上着の季節か、と肌寒く感じられ始めた風を体に浴びながら歩く。

学校にはしっかり定刻どおりに到着する。コンビニで一個百五円のおにぎりを二個買い、道中食べて袋はしっかり分別して捨ててき

た。ここにいる大半の人間とは年が一つ上か下しか違わないはずなのに、なぜか彼らの談笑が遠く感じる。最近になってより顕著だ。それは匠が人とは違う日常を送っているからだろうか。いや、そうとも言い切れないだろう。

ある日を境にして、他人の存在が自分とくっきり切り離される瞬間がある。最初は漠然とした間隔なのに、気が付いたら全身にいきわたるほどに鮮明になる。ついこの間までは何も違和感無く他人と笑いあい、意見を交換し合い、移動教室のときは一緒に行動して、昼休みはくだらない話で盛り上がる、そういう日常が確かにあったはずなのに、気が付いたらそれができなくなっている。笑っている自分を発見する感覚と言ったら近いものになるのか。斜め上から自分のことを見下ろす、とまで極端に行かないにせよ、自分というものがどこかで二分化されて、もう一方の自分が日常にいる自分を冷たい目で見ているようなイメージが、唐突にわきあがることがある。これは、自分だけの感覚だろうか。

匠の場合、それの発現が早かった。中学三年生かそこらのあたりで、もうすでに自分と他人の溝を感じていた。明確なポイントは思い出せないが、そのあたりだろうと推測する。最初はふと自分が周囲からはじき出されたみたいに、唐突に思考がフラットになる。平坦で、何も感じなくなって、どうして今自分はここにいるのだろう、なんてどうでも良いことを、一瞬真剣に考えたりする。気づく、というのが感覚的に一番近い。それが発生してしばらく経つと、今度は突然空しくなったり、哀しくなる。やがて、誰とも話したくなくなる。

匠はそれを悪いことだとは思わない。自分という感覚が明確になる気がして、むしろ好ましく思っている。その感覚にいるときだけ世界はとても静かで、その静寂にずっと身を浸していたいと思う。安っぽい感傷だってことはことは十分に分かっていても、それでもそこに停滞していたくなる。そんな静けさ。

――なんて、どうでも良いことだろう。

匠は溜息をそっとはいて、後ろの扉から教室に入る。話しかけてくるような友人はいない――最近になってようやく「このクラスには」という形容詞が付くようになったが――ので、無言のまま自分の席に座る。話しかけられれば対応するが、高校生ともなれば各々が大なり小なり自分のグループに属しているから、あまり他者との交流は広がらないような気がする。

昼休みになったら聖を昼食に誘おうか。

（……なんだそりゃ）

苦笑する。こんなことを考える自分が酷くレアだ。短い人生経験の中でも、飛び切り考えられない発想だった。匠は食事をパーソナルなものだと思っていたし、実際他人がいると落ち着いて食事ができない性質である。神経が細いのだろうか。食事の最中は外的への集中力が鈍るから、安心できないという発想だろうか。分からないが、とにかく落ち着いて食事をするために、匠は昼休みは今までずっと一人で活動してきた。

とはいえいつだかも聖はこの教室にたいした理由も無くやってきていたではないか。逆を自分がやって何が悪い、という開き直りのような感情が匠の内側で燻っていた。何に対しての開き直りなのかはこの際おいておく。

いつに無く非生産的な思考をしている間に、眠そうな顔をした担任教師が入ってきたので、匠は思考を打ち切って午前中をどうやって乗り切ろうかに思考をシフトした。

午前中が終わったので聖を探しに行く。理由は特にない。ただ、たまには他人と時間を過ごすのも良いことかもしれない、となんとなく思っただけだ。しかしその思考自体が匠の人生にとってかなり珍しい。砂場を掘ったら石油が出てくるレベルの希少価値である。

聖のクラスは一つ下の階にある。どうして同じ学年で階が違うのかがいまひとつ分からなかったが、馬鹿馬鹿しい複雑な理由があるのだろう。匠のクラスは三階で、聖のクラスは二階だった。

目的のクラスに到達し、匠は前の扉から堂々と入る。一瞬の静寂が波のように伝わり、視線が集中し、すぐにもとの状態に戻る。その間僅か一秒足らず。これが他のクラスに入ったときに感覚か、と匠は一人感動していた。人生に無駄な知識はつき物である。それが人生を豊かにするのだと昔の偉い人は言っていた。

「あれ、匠？」

「よう」

聖は窓際の席で鞄をごそごそとやっていた。次の授業の準備だろうか。まじめな奴である。匠個人の状態を言えば、まず鞄に授業道具が入っていない。匠のスタイルは聞いて覚えるということに限定していて、教科書やノートの必要性を感じていなかった。それで何とかなっているのだからとやかく言われる筋合いはない。成績は決して良いとはいえなかったが。

「昼食った？」

「どうしてそれを私に聞くの」

「奢ってやるからどっか行こうぜ」

「気持ち悪いんだけど」

「ばっさりしすぎてむしろ清々しいくらいだなてめえ」

「だって、どういう風の吹き回し？」

「いや、毎晩お世話になってるから、バイト料くらい払おうと思ってな」出任せである。ちなみにこの発言が大いなる誤解を生んでいることを彼は知らない。

「従順さが調教されたみたいで結構だわ」聖も同様である。「良いわ、別に購買で何か買おうと思ってたところだったし、行きましょ」

匠は教室を出て行く聖に従う。教室を出て行った後、ざわめきが拡大したような気がしたが取り立てて気にする必要もないだろう。

「それにしても、あんたも随分鋭くなったじゃない」聖は珍しく感心したように言う。

「何が？」貢物をするタイミングの話だろうか。

「……？　私に話があったんじゃないの」

「いや、別に」
「え」聖はぴたりと足を止める。「何の用事も無く来たの？　何か辛いことでもあった？　あんた孤立主義だと思ってたけど、気のせい？」
「いや、その認識は間違ってはいないし、最近の辛いことは毎晩ぼこぼこにされて満身創痍なことだが、まあそういうことだ」
「えー、あんたってそういう人間だっけ」
「同僚と仲良くしようとするのは社会人の基本スキルだろ」
「あんたまだ学生でしょ」
聖は溜息を吐くが、だからと言って教室に戻るようなことはしなかった。そのまま一回に降りて、エントランスの横にある購買で菓子パンとウーロン茶を買っていた。匠もサンドイッチを一つと売れ残っていたメロンパンを買い、二人分の料金を店員に渡した。
「どこで食べるの」
「屋上」
「寒くない？」
「だから人がいないんだろ」
匠の言葉に聖も納得した様子だった。大勢の中にいることが苦手なことは二人とも共通している。
階段を上がり屋上への扉を開ける。さび付いたような甲高い音がして扉が開いた。肌寒い風が吹き込んで、地面に積もった誇りを散らした。聖の長い黒髪が、ふわりと風邪と一緒に舞い上がる。聖はそれを煩わしそうに左手で抑えた。
予想通り屋上に人はいなかった。しかし寒いということもまた予想通りだった。とても座って落ち着いて食べられるような雰囲気ではない。仕方なく、フェンスに寄りかかって食べることにする。座ってしまうと体温が逃げるからだ。
「女子って冬は不利だよね。男子の長ズボンが羨ましい」
「けど夏は有利じゃねーか。常時短パンみたいなもんだろ」
「ソックスがあるから一概にそうとは言えないかも。体に密着して

るから、暑いんだ、あれ」
　吐く息こそまだ白くはないが、もう一ヶ月かそこらで気温が零度知覚まで下がる日も出てくるだろう。北国には張ると冬しかない気がする。夏と秋はあっという間に通り過ぎていくのだ。天気予報で本州の人々が寒がっている気温を見て、生易しいと鼻で笑うのはもはや年間行事である。北国の冬は氷点下二十度の日などざらである。外で雑巾を振り回すと固まるし、鼻で息をすると鼻水が凍って花の中でくっついたりもする。現地の人間だけが分かる笑い話である。
「……さっきの話」蛍はパンをかじりながら言う。そのせいで語尾がもそもそした感じになっている。
「ああ、何だったのよ、結局」
「なんか馬鹿みたいにでかい気配があるような、無いような、そんな気がしたんだけど、って話」
「気配？　メンタルシフトの？」匠はサンドイッチの最後のひとかけらを飲み込む。
「そうそう」
「ふーん……俺には良くわかんないな。蛍さんに聞いてみれば。きっと俺よりましな返事が返ってくると思うけど」
「連絡先知らないもの」
「マスターに聞けば」
「いや……そこまでして知らなくても良いかなって。大体、勘違いかもしれないし。本当にそんなに大きな気配があるなら、マスターも聖さんも、私よりも先に気が付いているはずだし。……でもなあ」
「はっきりしてないメンタルシフトなんてあるのかよ」
「無いわ」
「なら気のせいなんじゃねーの」
「でも、メンタルシフトは結局漂ってる感情の断片が結晶したものだから、その出現を事前に察知することは、理論上は不可能じゃない、はず」
「その断片の気配をお前が掴んでるって？」

「うーん……そうなのかな、そうかもしれない。けど、かなり曖昧だから」
「出現前から気配が漏れ出るなんて、もし本当だとしたらかなりやばいんじゃねーの」
「ま、そうなんだけどさ」
「一応マスターに言っておこうぜ。別に言ったからって殺されるって訳じゃないんだし」
「……それもそうね」
聖はぼんやりと街並みを眺めている。この後者は高台に建てられた建物なので、屋上に上ると街の大部分を見ることができる。夜に来れば、おそらく星空のような夜景が見えるはずである。残念ながら匠は夜の時間帯にここに来たことはない。
間の抜けたチャイムが下の階から聞こえてくる。
「もう終わりか」
「寒い寒い、早く入ろ」
匠の返事を待たずに聖は校舎へと消えていく。
匠は聖の言葉が気になって街並みを見る。確かに、漠然とした不安のようなものはうっすら感じるような気がする。漠然としていない不安なんてあるのか、と匠は思い直し、結局は全て気のせいにしてしまうのが楽なんだろうと結論付けた。
晴れていた空は雲が出始めている。一雨ごとに気温が下がるのがこの季節だ。

「巨大なメンタルシフトの気配？」
マスターは全く覚えがない、といった表情で繰り返した。
匠はぼろ雑巾のようになって店の床に沈んでいる。その横のテーブルでは聖が足を組んでコーヒーを啜っている最中だった。その様子は奴隷と女王様といった具合で、良い感じにサディストアンドマゾヒストの構図が出来上がっていた。匠はその事実が大変不満だったが、もう体どころか指一本動かすのも奥劫で、その体制に甘んじ

ている。ちなみに時刻は夜の十時を少し回ったところ。結界の張られた店内は、夜の静けさに更に人工的なものをプラスして、何とも心が洗われる空間を作り上げていた。匠はこの人工的な静けさが嫌いではなかった。

マスターは顎を撫でながら、「……いやあ、覚えはねえな」

「本当に？」聖が聞く。その目はいつもに比べて比較的真剣である。

「俺も探知型じゃねえからはっきりとは言えんが……この街がざわついてるって言う蛍の報告もあるしな、あんまりシカトして良い状況でもない、か」マスターはカップを布巾で拭きながらしばらく黙って、「ま、適当に調べてみるわ。手遅れにならない前にな」

「万が一ってこともあるわ。その付けを払うのはマスターだけじゃなくて私たちもなんだから、真剣にやってよ」

「俺はいつだって真剣だっての」

聖も半笑いであるあたり、それほど本気で言ったわけではなさそうだ。もちろん出てくる前に対策が取れているのが望ましい。匠のようにまだ新人気分が抜けない人間にとっては、ベテラン以上に重要なこととも言えた。願わくばこれが安定の方向へ進むことを、と匠は地面に伏せながら割りと本気で祈っていた。

「それよか匠、お前いつまでも同級生の女子にぼこぼこにされて情けなくねえのか」

「好きでぼこぼこにされてるみたいに言わないでくれる……」それではただの変体である。この構図からしてあながち否定しきれないあたりが哀しい。第三者の意見は冷徹である。

「……ふむ、流石にナチュラルとはいっても、戦闘経験の差は覆せんか」

「そんな一朝一夕の技術で抜かされたら、流石の私もショックで寝込むわ」

それはそれで見てみた息もしたが、自分と聖との間にそれだけの力の差があることは匠も認めるところである。どうも地方レベルで納まる器ではないような気がしてならない。おそらく未成年である

ことを考慮されているのだろうが、そんなものこっち側の世界に入った時点で何の意味も成さないことは分かりそうなものだが。もっとも、そのおかげで匠の戦闘能力が飛躍的に向上していることは事実である。

聖はカップを置いて立ち上がる。「そろそろ帰るわ、私」

「こいつと違って余力がありそうだな、お前は」マスターはからかうように言う。

「一応、これでも現役なので」

「手厳しいな、なあ、匠」

匠にはそんなどうでも良い問いに答えるだけの余力は残っていない。取り合えず伏して体力を回復させることが目下の最重要課題である。

聖は肩をすくめて、鞄を持って外に出て行った。チリン、と涼しげなベルの音が店内に響いた。

「おら、お前も帰れ帰れ」

「……無理、お願いします、泊めてください」

匠はぐったりとしたまま言った。マスターは深々とこれ見よがしに溜息を吐いて、結局「余計なところを触るなよ」と言って帰っていった。匠としては別にマスターがここで生活しているのならそれでも良いのだが、そこはマスターなりに何か思うところがあるのかもしれない。鍵のしまる音がしてから、匠は芋虫のようにリビングまで張って言って、汚れた服はそのままにソファーに倒れこんだ。心地の良い疲労感がたくみの体を包み、眠りへと誘った。体の痛みは、寝る瞬間だけは気にならない。全てが麻痺している。眠るときの心地よさは、不思議だ。

店の電気をつけっぱなしのまま、匠は次の日の朝まで眠りこけた。

＊

「……ここかな」
聖は次の日の放課後、一人で蛍の家を訪れていた。件の巨大なメンタルシフトの気配を聞くためである。おそらくはマスターのほうから連絡が言ってるだろうが、直接聞くことで得られる情報もあると彼女の長年の経験は示していた。
蛍がいるという確証は無かったが、いないならいないで帰ってくるまで待つだけの話だ。聖は部活動もしていないし、友人と呼べるような友人もいない。放課後は完全に自由な時間だ。時々メンタルシフトの出現によって阻害されることもあったが、それは三百六十五日二十四時間いつだって同じことである。地方が人手不足なのはどこの機関も同じである。かといってあんまり人が多すぎると帰って行動しにくい。バランスとは難しいものだ。
聖はぎしぎしとうなる階段を上り、古ぼけたインターホンを鳴らす。音符のマークが付いた旧式のものだ。しばらく待っていると、中から「はーい」と和やかな声が聞こえた。
「あれ、聖さん？」
「こんにちは」
蛍は驚いたように目を見開いたが、すぐに笑顔になった。それから困ったような表情になり、「えと、どうしよう、もしかして遊びに来たの」
「そういうわけではないですけど、近いかもしれませんね」
「あう、どうしよう」蛍は自分の部屋の仲と外を見比べるように首を動かしている。ころころと変わる表情と良い、感情が豊かな人だと思った。「……かなり汚いけど、笑わないでよ」
「あ、いえ、別に上がらなくても」
「いいえ、どうせ来たんだから、お茶の一杯くらい飲んでいってもらいます」

蛍は覚悟を決めたように踵を返し、自分の家の中へとずんずんと進んでいく。その後姿には妙な希薄があり、聖はこのまま後を追って良いものかと一瞬迷ったが、結局好意に甘えてお邪魔することにする。

結論から言えば、それほど汚いというわけでもなかった。ただ脱ぎ捨てられた服の類がちらほらと床にあるだけである。全く常識の範囲内と言って良い。もっとすさまじい光景を想像していた聖は、ほっと域をなでおろす。反応に困るような状況にならなくて良かった。前回来たときがそもそも綺麗過ぎたのだ。

「……どう」

「いえ、ぜんぜん気にならないですよ」

「本当に？　絶対？」蛍は落ち津か無そうに視線を泳がせている。

「個人的には完全にアウトなんだけど」

「私の部屋もこんな感じですよ」

「うーん、一人でいるときなら良いんだけど。部屋を片付けるのって結局プライドの問題だと思わない？　片付けなくても実生活にあんまり影響はないもの」

「そうかもしれませんね」聖はくすりと笑って言う。

蛍が奥のほうへと言ってしまったので、聖は適当に床に座る。キッチンのほうからはお湯が沸く音が微かに聞こえてくる。改めて観察するが、物が少ない部屋だと思う。本州から転属になったということは引っ越してきたということだろうに、荷造りのダンボールなどは見当たらない。もともと私物が少ない人なのだろう。

程なくして蛍がトレイにカップを似客乗せてやってくる。二人は向かい合って座り、まず一口紅茶を飲んだ。前回とは味が違う。オレンジペコかダージリンか。癖のない味はこのどちらかだろうかと思うが自信はない。紅茶の銘柄にはあまり詳しくないので、結局黙っていた。

「それで、えっと、何の話だったのかな」

「蛍さんは、この街に巨大なメンタルシフトの気配を感じています

か」単刀直入に聖は切り出した。
面食らったように蛍は動きを止める。その動作の一つ一つを見逃さないように聖は蛍をじっと見つめた。
「昨日マスターに連絡されたあれ？　夜中にたたき起こされてかなりブルーだったんだけど。何が嬉しくてむさいおっさんの声を夜中に……」
「どう思いますか」
「……私も、感じているような、いないような。ごめんなさい、はっきりとは分からないの。こんなことってないよね。メンタルシフトは発生したら絶対にわかるはずなのに」
「私も同じ印象なんです」
「あ、本当に？　うーん、ならいよいよありえない話じゃないのかな」蛍は目を瞑って考える。「実際にその巨大なメンタルシフトがいるとして、どうすれば良いと思う？　私たちは四人出し、本州から不確定な情報で応援を呼ぶわけにも行かない。打てる手って言うのは、結局当たって砕けろってことになるような気がするんだけど」
「それはそうなんですけど」
「実際、世の中の大半の問題ってそんな感じだよね。直面するまで打つ手を考えられない。というよりも、人間が元来そういう風にできているのかも。機能的にも未来を予測する器官は人間には無いわけだし」
確かにそうかもしれない、と聖は思う。いついかなる問題も、直面するまではその実体が良く見えない。はっきりとその姿が見えてからじゃないと、人間の防衛昨日はまともに働かないのかもしれない。それは未来が常に不確定であるし、人間の能力の一切が未来に及ばないことにも起因しているだろう。
「……分かりました」紅茶を飲み終わった聖は立ち上がる。「お邪魔しました。今日はこれで帰ります」
「え、もう帰っちゃうの？」
「あんまり長居すると迷惑ですし」

「そんなこと無いけどな」蛍は笑って言う。「じゃあ今度、何も無いときにまた遊びに着て。こんな殺風景な話題が浮かんでこないときに」
その微笑に聖も笑顔で返す。「はい、そのときはケーキか何か買ってきます」
外に出ると日が沈み始めていた。今日もまた匠に訓練を施すべく、聖は珈琲茶への道をたどり始めた。

数歩、歩く。
空気が唐突に膨れ上がったような錯覚。
肌を刺すような痛烈な気配。
萎縮し、
すぐにはちきれんばかりに増大する。
大きく、
タールのようにどろりとした感触が、聖の腕を撫でる。
「――これは」
間違いなくメンタルシフトの出現の気配、だが、
（三点？）
聖の感覚は三箇所で同時にメンタルシフトの出現を察知していた。そのどれもが最近のものに類を見ないほど強烈な気配を放っている。これほど大きなメンタルシフトが複数個所で出現するというのは、聖は聞いたことが無かった。
蛍の家に引き返そうかとも思うが、それにしては少し距離が開きすぎていた。メンタルシフトの位置関係からして、蛍はアパートから五百メートル地点のポイントに当たるだろう。珈琲茶の近くのスクランブル交差点にも言ってん。それはマスターが何とかするだろう。ならば自分は、この先、ちょうど街の中央通の恥にあたる部分を担当することになる。
通常メンタルシフトの規模が兄弟であるときは、分担作業などはしない。そうすることで個人の生存率が下がるからだ。しかし、こ

のように複数箇所で出現するという異常事態において、多人数で万全を期して相手に当たるという理想的な環境は望めそうにない。
やっぱり自分の感覚は当たっていたのだ、という微かな喜びと、これを本当に収束できるのか、という不安感がごちゃ混ぜになったまま、聖は現場へと走る。

＊

「起きろ匠！」
怒声にも近い大声でたたき起こされる。左右の感覚すら消失した状態で起き上がり、匠は左右へふらふらと揺れる。何事かと思って立ち上がれば、マスターがこちらに闘牛のように向かってくるところだった。
「ちょ、ちょ、なんすか」
その迫力に食い殺されそうな危機感を感じた匠は、両手を体の前に出しながら後座する。
「仕事だよ、仕事！　よかったなぁ！　出番が来て！」
言いながらマスターは匠の手首をつかんで引きずるようにリビングを出て行く。匠は抵抗しようかどうしようか迷ったが、緊急なのはマスターの気配からして間違いなさそうなので、おとなしく引きずられるがままになる。
珈琲茶はどうやら結界内に入っているらしく、窓から見える景色は人気がない。無機質な人工物が立ち並ぶ世界が広がっているだけだ。
「俺一人すか」匠はまだ寝ぼけた声を出している。
「今回は俺が同伴する」マスターは厚い胸をドンと叩く。匠はその

暑苦しさに顔をしかめながら、
「聖や蛍さんは？」
「ああ、二人はもう別行動だ。あっちゃこっちゃで大混乱だ。多分、三箇所かな。俺もここで管理職ごっこだけやってりゃいいってわけにもいかなくなった。ま、こっちの人数以上の例外で無かっただけ、不幸中の幸いといったところなのかもな」
「……何があったのさ」マスターが前線に行くといっているのは始めて聞く。それほど大事があったということだ。少なくとも、匠がADに入ってから一番の大事であるのは間違いない。
「聖の直感が当たったってことだ。残念ながらな」マスターは忌々しそうに鼻で笑う。「メンタルシフトは人間の不の感情が凝縮した物だって話はしたよな。最近この街では自殺者が多発してる。なぜか交通事故も多い。そういう不幸はこの場合必然なんだが、まあいい、そういうわけで、住民が感じている不幸指数は結構高いわけだ」
マスターはカウンターの裏で何かを取り出そうと悪戦苦闘している。ガツン、ガツンと何かとカウンターがぶつかる音も聞こえる。
「そういう不幸の感情は、人間の無意識に堆積する。こっちで対策使用にも、人々の生活に密着しているからどうしようもない。どうにかしようと思ったら俺らの誰かが政治家にならなきゃ並んだろうな。で、そのつもり積もった不幸が不満とつながり、過剰に反応するようになる。人の不幸は他人の不幸を呼び、病気のように蔓延していく。そうするとな、ある一定までは人は理性でそれを抑えておくんだが、あるところを境に爆発する」
「爆発、つまり」
「そう、馬鹿でかいメンタルシフトが発生する。そういうメンタルシフトは、えげつない見た目をしていることが多い。人間が進行している強大なもの――神や悪魔、概念上の生物や迷信――それらを模したものが出現する。今回の場合、それに加えて複数のポイントで出現した」マスターはカウンターの向こうで乾いた笑い声を上げる。「どう考えてもな、四人やそこらで当たる状況じゃねえんだ。

だがどうしようもない。ＡＤのメンバーは本州の大都市を中心に配置されているから、末端までは手が及ばないんだからな」
よっと、と言ってマスターは立ち上がる。その横には、マスターの縮尺まで拡大されたような、馬鹿でかいアタッシュケースがおかれている。果たしてその大きさの鞄をアタッシュケースという名称でくくって良いのかはかなり疑問だったが、少なくともアタッシュケースの見た目をしている鞄を持っている。その横でマスターは店の制服を脱ぎだした。岩のように隆起した筋肉の鎧が外気にさらされる。突然何をしているのかこのおっさんは、と匠は思ったが、何のことはない、戦闘用の服装に着替えるだけだった。おそらくそれがＡＤの制服なのだろう。スーツのような直線系のシルエットの服に、黒いコートに似た上着を羽織る。一見すると普通のコートにしか見えなかったが、革のように鈍い光沢を放つそれは見るからに頑丈そうだった。
「……ま、そんなこと言っててもどうしようもねえ。ここには四人しかいないし、それ以上の戦力は望めない。ま、蛍がいるだけでよしとするべきだろう――それと、お前もな」
マスターは匠の背中を叩く。
匠は最大限不敵に笑う。誰かに必要とされることは嬉しいと思ったことを表情に出さないようにしていたが、あまり効果が無いことが自分でも分かった。
「任せろよ」
匠の口調はいつもどおりだったが、その内側に隠された感情は隠しようがない。マスターはそれを感じ取ったが黙っていた。本当の意味で信頼関係を結ぶのは、きっと今日これからの行動にかかっていると分かっていたからだ。
「ああ、頼りにしてるぜ」
雇い主とその部下が始めて一緒に仕事をすることになったのは、自己紹介から二ヶ月になろうかという日のこととなった。

マスターと匠は珈琲茶から一キロ程度のスクランブル交差点にやってきた。この街で一番人通りが多いところだ。すぐそこには駅があり、普段はそこからひっきりなしに人が吐き出されたり、飲み込まれたりしている。

しかし、今は人気がない。火災かガス事故か分からないが大きな爆発があったらしく、周囲には消防車と救急車が入り乱れる状態となっている。当然、その周りには逃げてきた人ごみがいて、それらの人々はナチュラルに野次馬へとシフトしていた。匠とマスターは、ちょうど人ごみに逆行する形で現場に到着した。

「すげえ人ごみだな」匠は人を嫌そうに見ながら言う。

「人間つーのは他人の不幸を喜ぶ性質だからな。どこまで言っても人は人。着飾ろうが教えを説こうが、立場が高かろうが低かろうが、人間の本質的な部分は何も変わらん。ただそれを見栄えの良い風呂敷で覆うかどうかの違いだけだ」

マスターは野次馬の群れから一歩引く。その近くに匠も寄る。二人はちょうど野次馬を観察する位置に付く。

人間観察が昔から好きだった。どうしてその人はそんなことをするのだろう、という疑問を解消しようと、解消できると信じていたからかもしれない。そういう発想自体が人からずれていると認識したのは、一体いつのことだっただろう。現実的な結果から言えば、人間がどうして人間なのかという問いの答えは出ず、人間はどこまで言っても不規則で不定形で不合理だった。

「……俺たちはよ、多分、人間を守るために戦ってるんじゃないんだよな」

「なら何のために戦ってんだよ、あんたらは」

「人間の感情の尊厳を守るため、とか最近は考えてるが、実際のところはどうなんだろうな。ＡＤのメンバーは多かれ少なかれ、人間なんてどうだって良いって思ってる、社会から外れちまった人間の集まりだからな。俺も例外じゃない。実際、俺たちは凶悪犯罪から人々を守ろうとしたり、テロを防止しようと四苦八苦してるわけじ

ゃねえ。なら何のために戦ってるんだろうな、俺たちは」
マスターは手に持っていたアタッシュケースを地面に置く。隆々とした腕の筋肉が持ち上げられ、
「それはきっと――人の感情に触れたいなんていう、淡い錯覚なのかもな」
パン、と神への祈りのように両手が打ち鳴らされる。
それと同時、匠の体を階層が移動したことを示す違和感が一瞬だけ包む。更に、空間そのものが隔離された感覚も発生する。階層移動と結界を同時にやったらしい。
野次馬と救急の人があふれていたスクランブル交差点からは、一切の人が消失している。あたりを満たすのは身にしみるような静寂だけだ。
――いや、それともう一つ。こちらを赤い眼でにらんでいる黒い影の姿だ。
「……マジで」匠は呆然と呟いた。
スクランブル交差点の中心、司法に伸びる道路をせき止める形で、黒い竜が出現していた。まるでビルのように巨大な体躯に、空を覆うような一対の翼を背中につけている。
「これほど巨大なメンタルシフトが出現するなんて地方じゃ前例がねえ。まともな対策が取れてない以上、ここで止めなきゃ街が地図から消失する。やってられねえよなぁ」マスターは頭をわしわしと掻く。「ま、そうも言ってられねえんだろうがな」
マスターは足元に置かれたアタッシュケースを小突くように蹴る。その衝撃を合図とするように鞄が開く。中に入っていたのは、鋭角なシルエットを持つグローブだった。鈍い黒色に光るそれには、ナックルパートの位置に金属がはめ込まれている。細い亀裂が入っていて、中に何かが仕込まれていることをうかがわせる。
「見た目どおり肉弾戦が好きなわけ？」
「銃とか弓とかの遠距離攻撃よりはな。あの手の武器は攻撃した感じがしねえ」マスターは不敵に笑う。「相手は竜だが、どうだ、見

てみての感想は」
「こんなところで悠長に喋っている場合じゃないってのは分かった」
「その判断はかなり正しいな」
「どうすんだよあれ、あんなの戦って勝てる相手なのか」
「近代兵器の類じゃ絶対に無理だな。だがな、俺たちの武器は、あいつと同じなんだぜ。別に木の棒でマシンガンと戦おうってわけじゃねえんだ。勝算はある。大体、こっちは二人係なんだ。個人行動をしている聖や蛍よりはだいぶマシだろうが」
それはそうだが、そういう問題ではないと匠は思う。
とにかくこのまま手をこまねいていれば、目の前の竜から不意打ちを受けて致命的なダメージを往古とは確実である。なんにせよ腹を決める必要がありそうだ。
イメージする。
体の中で燻っている感情を。その一つ一つを。
それぞれは独立して体の中にあるデヴァイス。人間が人間であるためのデヴァイシス。
独立した感情に対して、感情を結晶させたもので戦う。その形は、何を意味しているのだろうか。
感情の潰し合い？
それとも、その逆なのか。
感情を愛するがゆえに、感情と戦うのか。
他でもない自分たちが、その感情と戦うのか。
それ自体が目的なのか。
だとするなら、匠やマスターの目的は、多分、
感情と戦うというその一点にあるのだろう。
匠は眼を開く。右手には変わらず半透明の赤色で構成された剣が同化している。余分な感情を剣に固めた性なのか、心は今までよりもずっと静かだ。
刀身の厚みは増しているように見える。基本的な体力が上がったから、剣の能力も上がったのか。感情のエネルギーを転換する効率

が上がったので、剣の大きさが増しているともいえる。見れば、剣の端々には今まではなかった装飾が施されている。それらは匠の心象風景に酷く似ていた。自分ならば剣にこう装飾するという願望が反映されているのかもしれない。

「さぁて」マスターはぐるりと首を回す。その両手には金属で補強された件のグローブがはめられている。「良いか匠。自重する必要はねえ。前回みたいに、現実世界に被害が漏れる可能性は、万に一つもねえ。俺がここにいる限り、現実世界の安定は保証してやる。だからな、お前の仕事は、全力で戦うことだけだ。瞬間的な火力は絶対にお前のほうが上だ。俺はもう自分のポテンシャルを殆ど使い切っているが、お前にはまだまだ可能性がある」マスターはニヤリと笑って、「存分に暴れろ」匠の肩を叩いてから駆け出した。

迫り来るマスターに竜が反応する。体を持ち上げると、まるで山そのものが動いているような、空そのものが動いているような威圧感を感じさせる。これは、自然だ。自然そのものが今、人間二人に牙を向こうとしている。

マスターは両の拳を合わせる。金属質な轟音と共に、両手に淡い青色の光が満ちる。感情エネルギーを添加したのだろうと匠は推測する。

「俺も、行くか」

匠は思い出す。聖と戦ったあの白い空間のことを。ただひたすらに無心で戦うことを強いられた、あの数時間のことを。

迫り来る危険性を予測して、体を操るということ。あらゆる方向の攻撃に対して、平等に対応するということ。

それに、あの時は使えなかった剣がある。

「……今回は、化け物だしな」

一人呟いて、匠はマスターの後を追うように走り出す。

＊

「……どーすんのよこれ」

聖は目の前で細い息を吐く影に対して、彼女にしては珍しく愚痴るように言った。

一番近いのは蛇、だろうか。判別にかなり困るが、おそらくそうだろう。全長は十メートルちょっとだと推測する。とぐろを巻いているのではっきりとは分からないのだ。ただ、蛇は高等部から職種のように腕を生やすようなことはしないと思う。それも人間の腕だ。黒い石膏でできたようにぬらりと光沢のあるそれらは、互いにつながりあって無知のように長く伸びている。正直言ってこんなグロテスクな見た目の怪物と戦うなんて冗談じゃない。とはいえそれが聖の仕事なのだから仕方がない。

「メンタルシフトってのは普通人型でしょ、全く……」

最近になって人型でないいわゆる特殊型の出現率が跳ね上がっていて、聖としては非常に迷惑な話だった。特殊型は人型に比べて戦闘力に村があるという欠点はあるが、攻撃のパターンが予測しずらく、対人戦とはまた別の感覚を要する。聖の棒術はむしろ対人戦に重きを置いたデヴァイスなので、特殊型との戦闘は正直言って気が進まなかった。

だからと言って放っておくわけにはいかないのだが。それに、苦手とは言ってもやりようはある。

聖は目を瞑り、デヴァイスを展開させる。一秒と立たずに聖の周囲を取り囲むように棒が出現し、彼女の周りをぐるぐると回り始める。今回の棒は一本一本が陶器のような白色で、初雪のような透明感を纏っている。そのうちの一本を聖は取り、下段に構えた。

当然ながら蛇との戦闘経験はない。ぶっつけ本番で、相手の動きの癖やパターンを見極めるしかない。しかも今回は味方の応援は望

めない。文字通り排水の人だった。彼女が止めなければ、この街の一部は甚大な被害を受けるだろう。もちろんその場合、聖の命はない。

蛇が滑らかな動きで聖に迫る。脈動するかのような胴の不規則な動きが生理的な嫌悪感を催させる。聖は中に浮かぶ棒を二本、けん制として前面に放つ。一本はおとりのためのなぎ払い、二本目はダメージを与えるための突きの動作を頭の中で念じる。このときの彼女の思考はそれぞれの棒一本一本に対応して分割されているので、念じているのは彼女の内側にあるうちの思考の一つである。

蛇の背中の手が伸び、払いの棒を弾く。つきの動作も同様に、棒の横から掴み取られた。これには聖も舌を巻いた。弾かれるのはともかくとして、掴まれるのは少しまずい。それだけの反応速度を相手が持っているということだからだ。突きは彼女の戦闘スタイルにおいて、基本であり最も威力の高い攻撃方法である。正面から突くだけでは相手にダメージは与えられそうにない。

聖は空中で棒を三本、壁のように体の前面に配置する。それぞれが十トン車の衝突クラスの衝撃に難なく耐える強度を持っている。蛇の頭部は棒に激突し、古びた鐘を鳴らすような鈍い音を当たりに撒き散らす。ギシリ、と棒が悲鳴のような音を立てた。たいした攻撃力だ、と聖は感心する。

聖はバックステップで距離を取る。聖のデヴァイスは意識的に操作できるので、基本的に距離をとっていたほうが有利に戦える。相手の様子が詳細に伺える中距離が、彼女が一番戦いやすいと感じている距離だ。

手元に引き戻した棒には損傷が伺えた。白い表面にところどころひびが入っている。長期戦は不利、と頭を切り替える。

蛇は地面を這うように再び突進してくる。赤く光った両眼が聖をにらんでいる。それに一瞬気をとられた。その隙に背中の手がよそうよりはるかな速い速度で伸びる。聖はそれを見て、反射的に自身の左右に棒を配置し、両手を磔にされたように左右にいっぱいに伸

ばした。両手を補助にすることで、棒の強度を更に上げることができるからだ。
両腕に砲丸をぶつけられたような衝撃。
白と黒が境界面で拮抗する。
ギシギシと骨が軋む音が聖の前腕から聞こえる。
（――重い）
聖は前に出る。後ろに引いたら追撃されることが分かっていたからだ。聖の周囲に展開されている棒を、迎撃砲のように体の前面を先にして配置する。両腕で蛇の攻撃を受け止めながら、聖は目で棒に攻撃を命令する。
デヴァイスの攻撃力とはすなわち意志力の強さだ。無意識かで行われる攻撃よりも、意識下で行われる攻撃のほうが強い。腕や脚のように実際の体を使って威力を底上げするのが一般的だが、聖の体勢的にそれはできない。代用として、目によって意志力を付加する。
ただ突くだけでは届かない。
もっと感情を乗せなければならない。
感情とは、何だろう、と場違いな問いが頭を掠める。
不完全な自分を構成するものだろうか。
完全な自分から、不完全な自分へと変化するプロセス。その触媒のようなものだろうか。
なら、感情が無ければ、完全？
動じないことが唯一の価値なのか。
感情を殺せば、確かに身軽になる。何を見ても何も感じなければ、欲望も快楽も悲しみも、何も感じることはない。人間としての不純が、全て取り払われることになる。
感情をコントロールできるデヴァイサーは、おそらくその境地にたどり着こうとすればたどり着けるだろう。なら、なぜ誰もそれをしないのか。
弓を引き絞るように力がためられた棒は、強烈な空気圧を突き抜けるように、最初は酷くゆっくりとした速度で前進する。蛇の両眼

がそれを捉えるが、彼に攻撃の手段はない。手を後ろに下げようとするが、聖がそれを妨害する。攻撃が通る一瞬の間だけ、その手を無力化さえできれば良い。

乗せた感情は、怒りか、悲しみか。

きっと、空虚。

そして、希望。

純白の聖の棒が蛇の頭部に亀裂を走らせる。表層が鎧のように硬い。一転に衝撃を集中させることで、その装甲を破ろうとする。周りの光景がとてもゆっくりと感じられる。

亀裂は一本、二本、と増えて、

そこで終わる。

（――足りない？）

聖の両側から死神が近付いてくるのを感じる。しかし彼女に取れる方法はもうない。回避ですら満足にできないだろう。

今まで自分が通ってきた道が走馬灯のように思い返される。そもそも自分は何がしたかったのだろうか。気が付いたらこんな不毛な戦いの毎日に身を浸していたような気がする。誰かに認めて欲しかったのだろうか。自分で自分の気持ちが良く分からない。……いや、自分の気持ちが分かる人間なんてそうはいないだろう。

けれど、きっと何かが足りなかったのだ。自分の日常に、何か決定的なものが不足していたのだ。だから自分は今こうして、死神が聖の前に現れたのだ。

それは、今からでは遅いのだろうか。今からでは手に入れられないのだろうか。

その、何かは。

自分に足りなかったものが最後まで不鮮明なまま、彼女は目を閉じる。

鼓膜を揺らす風の音と、

「集――、破」

二つのワード。

旋律のように滑らかな。
遠くのほうから歌のように聞こえる声。
弓の弦が鳴る音が、静かに鼓膜を揺らす。
聖が作り出した亀裂に寸分たがわない形で、矢の残光が刺さりこむように消えていく。あまりに速くて、矢の本体は視認できなかった。
聖の両腕を満たしていた圧力が急速に消えていく。今まで影のように長い体を這わせていた蛇は、求心力を失った円運動のように、緩やかに景色に解けていく。
最後には、欠片も残らなかった。

「大丈夫？」
蛍がゆっくりと近付いてくる。着ている服はパンクファッションのようにあちこちが芸術的に破れていた。見れば、めがねのレンズも二箇所程度ひびが入っている。
「……死んだかと思った」
「私も思った。やめてよ、心臓に悪い」
からからと笑う蛍は、相当に疲れているように見えた。普段の覇気のようなものが感じられない。それでも、おそらくは今の聖よりも戦力になるだろう。底の見えない実力である。
自分が助かったのだという理解がようやく追いついて、聖の体から急激に緊張感が無くなっていく。空気の抜けたタイヤのように力が抜けて、地面にぺたんと座り込んだ。
「何とかなったんだ……」
「マスターと匠君のほうは知らないけどね」
「まだ戦ってるの」
「みたいだけど、ま、今の私たちが行っても間に合わないし、間に合ったとしても足手まといだから、まあ大人しくしていよう。二人が万が一取り逃がしたときに、すぐに動けるようにしておくほうが重要だと思う」蛍は淡々と言う。状況を冷静に分析するのは職業軍

人の必須スキルだ。今の聖はそのスキルを失いつつあったから、殆ど何も考えないでその言葉に頷いた。
第二階層は静かだ。
現実もこれくらい安らかだったら、きっとメンタルシフトなんて生まれないだろうと聖は思った。
結局のところ、安らぎとは静けさなのだ。何から何まで、全てが自己主張をしすぎて、世界にはノイズがあふれている。飽和して、もうこれ以上何も入らないというところに、人々の関係がノイズをねじ込んでいる。その反動で、静けさの中にいると安らいでいるような錯覚を覚えるのだ。
――いや、でも、そういう考えだから、自分は死に掛けたのか。
（そう、かも）
結局、聖に足りなかったものは、ノイズを許容するキャパシティかもしれない。
でも、それはぎりぎりのところで間に合ったらしい。
聖は蛍のほうを見る。目が合う。蛍はやわらかく微笑んだ。その表情を直視できなくて、聖は眼をそらす。
他人を許容することで、世界が生み出すノイズに耐えられるようになるのだろう。
それが良いことなのか悪いことなのか、今の聖には良く分からなかった。

＊

匠は爆ぜるように地面を蹴る。遠慮はしない。完全に相手を殺すことを目的として動くことを決意する。

匠は柄に左手を添える。剣の発光が更に増した。
黒龍は今はマスターのほうに注意を向けている。その側面を回り込んで、攻撃する。狙うは、首。
黒龍の口からオブジェのように巨大な縁談が測れる。それをマスターは正面からガードする。その目的は、匠に自由に攻撃させるためのおとり。
マスターの服はところどころが焦げているが、大きな外傷はない。マスターの前面をすっぽりと覆うように、青色のたてが出現している。感情エネルギーの具象化の速度がかなり速い。
そのたてを解除して、マスターは黒龍の頭部へと跳躍する。しかしそこに到達する前に、鋭く研ぎ澄まされた竜の右腕が迫る。
マスターはニヤリと笑う。
匠は右腕に注意を集中している竜に向けて一気に接近する。決めるなら一撃で。剣に力を更にこめる。これまではなんとなく鹿イメージできていなかった感情のエネルギーが、明晰に感じられるようになった。それは経験則によって導かれた、効率的な力の運用法だった。
飛び上がった匠は一直線に竜の首へ迫る。生物共通の弱点は頭部だ。しかし有効だとして与えるのなら首、あるいは首と肩の境目だ。頭部は弱点ゆえに様々な防御法がとられている。この竜は感情から生まれた非現実的な存在だが、基本的な生物のルールにのっとっていることを知っている。
ゆえに、首。
落とすまではいかなくても、ダメージは与えられるはず。
一閃。
赤い残光をまとった匠の剣は、竜の首に吸い込まれるようにして、はじかれる。
「う、おっ」
匠はあまりに硬質な手ごたえに、空中でバランスを崩す。竜の瞳がぎょろりと匠のほうを見る。次の瞬間には、瞳だけではなく顔そ

のものがこちらを向いていた。
ちらちらと焔の余波が口元から生じる。
匠は剣の切っ先を前面に向ける。これはイメージの世界。剣を形どったのは、相手を傷つけようとしていたから。
ならば、自分を守るためのイメージ。皇室で、何者をも通さない盾。
どのような現象化は、さっきマスターが実際にやって見せてくれている。できないわけがないという根拠のない確信が脳裏を満たす。
炎弾。
匠の意識は完全に剣の内側へと吸い込まれる。
匠の目の前に、薄いが確実に盾が出現する。その色は、先ほどと同様の赤色。その色は迫りくる炎に似ている。
反発。
感情同士が反発し合い、その余波が匠の体へと伝わる。
そしてなすすべもなく匠は吹き飛ばされる。幸いにして体に外傷はないが、この勢いで地面に叩きつけられるのはしゃれにならない。
「よ、っと」
その匠の体をマスターの太い腕がつかむ。二人は無事に地面に着地する。追撃してきた竜の炎弾を回避し、一定の距離を保ってからマスターは匠を話した。
「大丈夫か」
「フォローはなしかよ」
「お前なら大丈夫だって信じてたんだよ」
「単に間に合わなかっただけだろ」
「年長者の言うことは素直に信じとくもんだぜ」
二人が軽口をたたきあっている間にも、黒龍はこちらをにらんで放さない。二人は目線で方向を再び示しあって、行動を再開する。
二方向に分かれるが、黒龍は匠のほうを向いた。先の攻撃の威力から匠のほうが危険度が高いと判断したのだろう。国流の瞳はさっきに濡れて、視線だけで存在そのものを固めるような恐怖感がある。

それを無視して匠は書ける。匠の総力はかなりのもので、聖との訓練によってその速度は更に上がっている。攻撃をよけるだけならどうとでもなる。

右へ、左へ、小刻みに動きながら黒龍を翻弄する。

黒龍の向こう側、ちょうどマスターがいるあたりから、絶大なエネルギーが結集しつつあるのを匠は感じていた。おそらく、マスターの攻撃の予備段階であろう。なら自分の仕事は、それまで黒龍の注意を引くことであると頭を切り替える。

再び右腕を件の形に切り替えて、国流に迫る。注意を引くのなら逃げてばかりではいられない。相手に自分こそが脅威であると認識させ続けなければ、注意を引き続けることなどできはしない。

（さっきは、弾かれた）

第一接触の映像を匠は思い出す。自分のこめられる限りの力を入れたはずだったが、まだ足りなかったのか。

構成要素は黒龍も匠の剣も同じはずである。なら、その攻撃と防御の結果はどこで決まるのか。単純。こめられた感情の総量で決まる。すなわちさっきの攻撃は、匠が攻撃のために研ぎ澄ませた感情エネルギーよりも、黒龍の表皮にこめられた感情エネルギーのほうが勝っていたということ。

もっと鋭く。

もっと冷たく。

もっと硬質に。

激する炎を固めるように。

（注意を引くだけじゃ終わらせない。俺がこいつを倒せば万事解決するのは間違いない）

再び挑む。匠の剣はもう不透明ではなく、実存する物体のように明確な赤色に染まっている。刀身は淡く発酵し、空からの光をも鈍く反射している。

匠は飛び上がる。その匠に向けて、これまでよりも数だのおきな炎弾が放たれる。匠が飛び上がるを待っていたのか、タイムラグが

少なかった。誘われた、という自覚はあるが、いまさら引くという選択肢はない。
もっと、もっと、
叫べ。
匠は咆哮しながら炎弾に迫る。その右手の剣は、すでに実存する物質以上の存在を手に入れていた。
真横に切る。
形のないはずの炎弾が、中央から二つに割れた。
黒龍の理性のないはずの瞳が驚愕に見開かれたように見えた。
（届け――！）
いっぱいに伸ばした剣が、黒龍の表皮に触れ、
硬質な音。
通らない。
炎弾を切り裂いたことにより、剣にこめられたエネルギーの大部分が消失してしまっていた。硬質な手ごたえを手首に感じながら、匠は目の前で開かれる黒龍の牙を見ていた。
その先の結果も。
「マスターっ！」
黒龍の背後から爆発的に気配が出現する。
両手にはめていたはずのグローブは左手しか付いておらず、そこからは大砲のようなギミックが腕と同化していた。まるで左腕が丸まる大砲になったような外見だ。鈍く黒く光っているのはグローブと同じだが、細やかな装飾や、流線型のフォルム、そしてこめられた感情の質が違いすぎた。
マスターは体を捻る。
撓める。
ためる。
まるで獲物に飛び掛る寸前の肉食獣の筋肉のように、
更に力を、
もっと感情を、

その姿を見て、匠はマスターが言っていた戦う理由に少し納得がいった。感情の尊厳を守る、ということは、感情に向き合うということとイコールだ。そのエネルギーのせいで自分が不完全な存在であることを認め、だからこそ野放しになっている感情の塊が許せない。その戦いの奇跡こそが、守りたいものであり、あえて言うならば戦う理由となるのかもしれない。

マスターの拳は黒龍の横腹に突き刺さる。その衝撃で山のように居枝否流の体が吹き飛んだ。ばらばらと黒龍の体を攻勢しているエネルギーが抜けていくのを匠は感じた。明らかに有効打だった。

そしてそのころには、匠の剣の力も復活している。

「匠ぃ！」

マスターの声。激励の声。音の波となって匠の内側を揺らす。

込める。今までの拙い自分の時間を、日々の記憶を。それは他の人から見ればなんて幼くて曖昧なことだろうと笑われるかもしれない。けれど、これが今の精一杯。眼を背けずに、立ち向かうと決めた覚悟の証。

匠の剣に翼が生えたように、流麗なフォルムが追加される。剣の塚から左右に延びたそれは、匠の腕をぐるりと覆った。

感情の尊厳。

（今の俺には、分からない、か）

それでも、それを見つめると決めた。

不完全な自分を拒絶しないと決めた。

だから、

匠の剣は黒龍の首を今度こそ捉え、その斬撃は黒龍の体内まで通る。感情が勘定と反発し合い、絶大なエネルギーを生んで消滅していく。

黒龍の体は霧のように二、三度揺れた後、無人の街へ向けて消えていった。

＊

全てが終わってもろもろの回収作業が終わるまでにかなりの時間を要した。匠は専門的な知識は何一つ持ち合わせていなかったので、その間は待ちぼうけである。静かな達成感に身を浸すという非常に贅沢な時間を過ごしている間、マスターいか二人のＡＤメンバーは何かに対してキリキリ働いていた。おそらくは結果以内で損傷した空間を直す作業とか、分散したメンタルシフトの行方の操作とか、素人には良く分からない事務的な処理がてんこ盛りだったのだろう。全てが終わったころにはもう日は暮れてしまっていた。

無人の喫茶店に四人が集合していた。それぞれが思い思いに傷を作り、無傷なものは一人もいない。しかし、その表情はそれなりの達成感に彩られている。聖と蛍は一人で行動していたということもあって、傷は匠よりも多い。しかし深い傷はなさそうだったのでほっとする。

「戦況報告！」

マスターが機嫌の良さそうな声で言う。

「煩い、こっちは疲れてんだから、でかい声出すな」匠は心底うんざりした声で言う。ぐったりとクラゲのようにテーブルに突っ伏していた。

「疲れてんのは俺も同じだクソガキ。大体てめえは後始末何もやってねえだろうが。労働力からいけば俺たちのほうがよっぽど疲れてんだよこの野郎」

聖は溜息を吐いて、「そんなどうでも良い言い争いなんて聞きたくなーい」

蛍も「右に同じ」といってテーブルに突っ伏している。第一印象からは遠く離れた仕草だった。

「だから、報告しろっつってんだよ。嫌なら俺の代わりに管理職やりやがれ」マスターはカウンターに指をトントンと打ち付けている。規則正しいリズムになんだか眠くなってきた。
「撃破して街の被害は最小限にしました。以上」
「右に同じ」
二人はそれだけ言って、もう帰っても良いですか、という視線をマスターに向けている。二人が健康状態ならばマスターも詳細を聞くこともするだろうが、明らかに労災レベルの働き振りをしてきたばかりである二人にとやかく言うのも気がとがめた。仕方なしに「ああ、分かった分かった、もう帰れ」と投げやりに言う始末だった。
二人はのろのろと立ち上がる。相当に珍しい光景だろうと重い、匠は心のレンズにその光景をしっかり保存する。子とあるごとに聖をからかうネタになるだろう、と匠は内心ほくそ笑んでいた。できることならカメラでも使いたいところだったが、底までの余力はないし、第一そんなにあからさまな行動を取れば確実に制裁される未来が待っているだろう。すでに限界近くまで疲労しているのだから、そんな面倒なことに自分から誘導することはない。
二人が帰ってから、マスターが珈琲を持ってくる。無言の気遣いとは珍しいこともある。それだけマスターも疲れているのかもしれない。表面には出さないが、ランナーズハイのような状態が過ぎて、軽いリバウンドのような状態に陥っているのかもしれない。匠はそんなことを考えながら、渡された珈琲を何も言わずに啜る。見ればマスターもカウンターの向こう側で珈琲を飲んでいた。
しばらく無言の時間が続く。不思議と違和感はなかった。疲労しているとき、人は静寂を許容するのかもしれない。
「まともに仕事したのが初めてにしては、上場の働きぶりだったぜ」しばらくしてマスターが口を開いた。今までになく落ち着いた声だった。
「……なら良かった」匠は眠そうな声で応える。
「使える手足が増えて嬉しいぜ」

「つーか俺、明日学校なんだけど。平日にこういうことすんのやめてくれねえかな」
「それは俺にじゃなくて、くそったれな民間人に言ってくれ」
「……そら無理だわな」
ふと匠は自分の服を見る。匠の着ている私服はボロボロで、修繕の仕様がない。制服に続いて匠の数少ない私服が犠牲になったことになる。その事実にたくみは大きく心を痛めたが、体が疲れているためか、感情面にそれほどのダメージは感じられなかった。これはすなわち疲労による感情の麻酔が効いているからだろう。明日になればその事実がじわじわと利いてきて、薄くなっていく一方の財布に心を痛める日々が始まるだろう。
「そういやさ、ＡＤの制服とかってこの店に無いのかよ。なんか聖がそれっぽいこと言ってたんだけど」
「ある」
「あるのかよ……それって俺の分は」
「ある」
「とっととよこせよ筋肉達磨。どうすんだよ、俺制服一着しかもってねえんだぞ。あとボロボロのやつと。いくら制服買っても足りないわ馬鹿野郎」
「緊急事態だったからしゃあないだろ。社会人ってのはな、不条理を不条理と思わず現実として取り入れるタフネスさが要求されるんだよ。上司を敬えクソガキ」
「だから、俺は学生だっつってんだろ」
こんなささいな言い争いが、酷く楽しい。それは新しい自分の発見だった。自分が必要とされて、その期待に僅かでも応えられたかもしれない、という手ごたえが、美酒のように体に染み渡っていくのを感じていた。
自分の生きていく道が明確になるというのは嬉しいことだ。
それだけで生きている気分になる。
でも、それは少し違うということを匠は分かっていた。

生きるってことは、結果ではないんだってことを。
生きるってことは、きっと過程なんだってことを。
空になったカップをカウンターに置く。それをマスターの元へ返す。マスターは少しずつ珈琲を飲んでいるようで、まだソーサーとカップを持ったままだった。目を閉じて、体に残された疲労を楽しんでいるような表情だった。
「……俺もそろそろ帰るわ」
「おう」
マスターは片手を挙げた。ぶっきらぼうではあったが、それは今までもっとも親密さを感じさせる動作だった。
ふと、立ち止まる。
「過労」出撃前に言っていたマスターの言葉を復唱する。
「あ？」マスターは怪訝な声で聞き返す。
「望むところだって言っとくよ」
そう言って匠はマスターの返事を待たずに店を出た。とてもじゃないが顔を合わせられるような状態じゃない。全く柄じゃない、と匠は自分で自分のことがなんだかおかしくなった。疲れすぎて頭のどこかがおかしくなってしまったのかもしれない。
冷たい夜風が匠の体を冷やした。街の喧騒が体を揺らす。街が今も喧騒であることに、自分の力も少しは役に立ったのかな、とぼんやりと思った。それは匠が始めて感じる種類の、とても微細な達成感だった。
時間は止まらずに進んでいく。
完全な時間に対して、人間はあまりにも不完全だ。
それでも、寄り添い合えば生きていけるような気もする。
感情によって不完全になった人間同士が集まって、より完全になろうとする。
人という名の、不完全な存在。
感情というデヴァイスによって彩られた、オリジナルの集合。
寄り添ったことで自由になった感情が胸の奥のほうで燻っている

のを感じながら、匠は夜の街を歩いた。
その燻りはきっと、人という一つの形の証明。
咆哮するデヴァイセスの、確かな熱量。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9648x/

咆哮するデヴァイセス - One's Explosive Emotion -

2011年11月1日03時24分発行